

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	開発に伴う協議と立会・試掘・発掘調査の概要（2019年度）
Author(s)	広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門,
Citation	広島大学埋蔵文化財調査研究紀要 , 12 : 13 - 82
Issue Date	2021-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/50706
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050706
Right	
Relation	

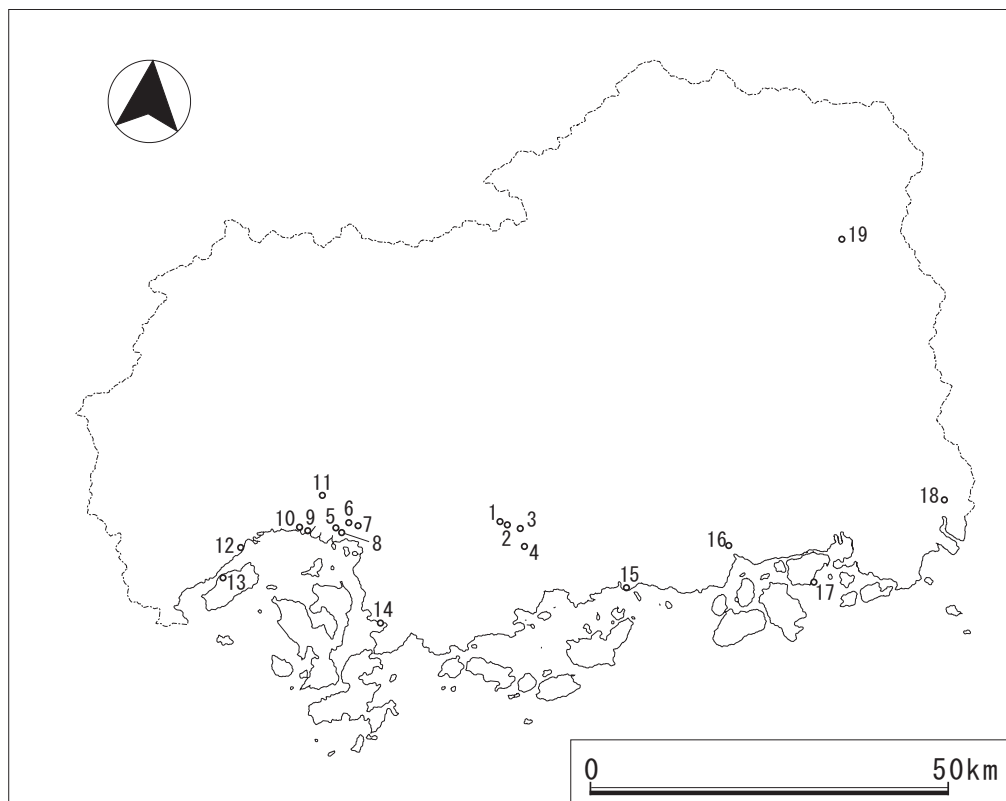


2. 開発に伴う協議と立会・試掘・発掘調査の概要（2019年度）

1. はじめに

広島大学が所管する広島県内の施設所在地は、本部キャンパスが位置する東広島市および統合移転する以前に本部キャンパスなどが所在した広島市を中心に広島県各地に分散しており、合計 27 ヶ所を数える（大学・附属学校校舎等を中心とする敷地 7 ヶ所、研究所等施設敷地 7 ヶ所、課外活動施設敷地 4 ヶ所、職員宿舎敷地 7 ヶ所、その他 2 ヶ所）。

これら大学関連施設において 2019 年度の埋蔵文化財に関連した開発事業に伴って 60 件の協議を行った。そのうち、東広島地区の構内外灯改修工事については工事に至らず、



第 5 図 広島大学の校地所在地図（職員宿舎・その他を除く）

1. 東広島地区
2. サイエンスパーク地区
3. 西条三永地区
4. 下三永地区
5. 東千田地区
6. 霞地区
7. 東雲地区
8. 翠地区
9. 観音地区
10. 庚午南地区
11. 三滝地区
12. 廿日市地区
13. 宮島地区
14. 呉地区
15. 竹原地区
16. 三原地区
17. 向島地区
18. 春日地区
19. 帝釈未渡地区

第1表 2019年度（令和元）広島大学における開発に伴う埋蔵文化財協議・発掘届一覧

件名	対象面積	協議書・発掘届提出日	対応
東広島地区			
1 (東広島) 園舎保育室空調用電源取設工事	375 m ²	2019年4月	工事
2 (東広島) 陣が平山災害復旧工事	4,795 m ²	2019年4月	立会
3 国際交流拠点施設建設	2,217 m ²	2019年4月	試掘
4 関西フェニックスの会設立10周年にかかる記念植樹	3 m ²	2019年4月	工事
5 (工) D1棟屋外雨水排水管改修工事	36 m ²	2019年5月	工事
6 (工) G7棟周辺雨水管等補修	25 m ²	2019年5月	工事
7 (東広島) 国際交流会館A棟屋外給水管漏水修繕	約26 m ²	2019年5月	工事
8 東図書館改修工事	1,741 m ²	2019年8月	立会
9 (東広島) 農場家畜舎新営工事(建・電・機)	5,332 m ²	2019年6月	工事
10 (東広島) 環境整備(国際交流会館C棟北側舗装)工事	1,211 m ²	2019年9月	工事
11 (生)農場3号圃場法面補修	7.8 m ²	2019年9月	工事
12 統合生命科学研究所農場圃場14号排水改修	250 m ²	2019年11月	工事
13 (教) K2棟インターロッキング等補修工事	約19 m ²	2019年5月	工事
14 (東広島) ががら1職員宿舎水路補修	約5 m ²	2019年5月	工事
15 野外装置(スタートラップ)の設置	2 m ²	2019年6月	工事
16 (東広島) ががら山等災害復旧工事(中郷線法面)	22 m ²	2019年6月	工事
17 (東広島) ショベル実機試験	約1,000 m ²	2019年6月	工事
18 コベルコ建機次世代先端技術共同研究講座ショベル実機試験	2,620.5 m ²	2019年6月	工事
19 (東広島) ががら山等災害復旧工事(アカデミック地区)	約1,248 m ²	2019年7月	工事
20 (東広島) ががら山等災害復旧工事(山中池南)	約383 m ²	2019年7月	立会
21 (東広島) ががら山等災害復旧工事(ががら職員宿舎西)	約12,835 m ²	2019年7月	立会
22 (東広島) ががら山等災害復旧工事(農場北西)	約253 m ²	2019年7月	立会
23 (東広島) ががら口歩道舗装補修	約11 m ²	2019年7月	工事
24 ポアホール(実験装置)の設置	0.04 m ²	2019年7月	工事
25 (東広島) 北地区駐輪場・車止め設置工事	約114.5 m ²	2019年8月	工事
26 (工) 講義棟B1・B4改修電気設備工事	2 m ²	2019年8月	工事
27 (東広島) 文学部北側駐輪場取設等工事	約426 m ²	2019年8月	立会
28 (東広島) 東西道アスファルト補修工事	約114.5 m ²	2019年8月	工事
29 (東広島) 工学部東側等舗装補修工事	約120.5 m ²	2019年8月	工事
30 (東広島) 学生プラザ東車止め設置工事	約0.4 m ²	2019年8月	工事
31 NTTドコモ基地局新設工事 [※]	74 m ²	2019年8月	工事
32 (東広島) 池の上学生宿舎屋外ガス漏れ配管修繕	約1.7 m ²	2019年9月	工事
33 鏡西谷遺跡整備芝張り工事		2019年10月	工事
34 両生類ボーリング工事	2.5 m ²	2019年11月	工事

35	(東広島) ショベル実機試験 (排水管接続)	30 m ²	2020年1月	工事
36	平和の小道プロジェクトに伴う植栽工事	162.5 m ²	2020年1月	工事
37	(東広島) 東大橋南側雨水管敷設工事	6.2 m ²	2020年1月	工事
38	(サイエンス) 倉庫等設置	68.9 m ²	2020年1月	工事
39	ががら山実証実験プロジェクトに伴う機器整備工事	約1 m ²	2020年1月	(立会)
40	(工) E2棟便所改修	2.5 m ²	2020年1月	工事
41	(教) C棟玄関スロープ屋根取設	1.2 m ²	2020年1月	工事
42	(東広島) 西体育館南通路インターロッキング補修	4.0 m ²	2020年1月	工事
43	(東広島) 西体育館1階手洗い系統排水管修繕	約8 m ²	2020年2月	工事
44	(東広島) 基幹整備 (特別高圧受変電設備に伴う基礎) 工事	約750 m ²	2020年2月	工事
46	(東広島) 西2 福利会館2階厨房排水管取替修繕	約8 m ²	2020年2月	工事
47	構内外灯改修工事		2020年5月	(工事)
48	附属幼稚園隣接地内教育活動に伴う埋蔵文化財協議		2020年12月	
霞地区				
1	(病) 入院棟防潮シート排水改修工事	4.2 m ²	2019年4月	工事
2	(霞) 基幹整備 (給水設備) 工事	約168 m ²	2019年12月	立会
3	原爆放射線医学研究所実験棟新営工事	約1,330 m ²	2020年1月	立会
4	霞図書館改修工事	約1,600 m ²	2019年8月	(立会)
5	(病) 入院棟北側防潮シート排水改修工事	約20 m ²	2019年8月	工事
6	(病) ローターアスファルト打替工事	約730 m ²	2019年9月	工事
7	(病) たんぼぼ保育園屋外消火管修理工事	6.5 m ²	2019年9月	工事
8	(病) 入院棟南側防潮シート排水改修工事	約21 m ²	2019年11月	工事
9	(霞) こすもす保育園給水管改修工事	約43.4 m ²	2020年2月	立会
翠地区				
1	(霞) 臨床管理棟東側通路補修	3.0 m ²	2019年6月	立会
東雲地区				
1	(東雲) 小学校校舎1階浴室排水管詰まり修理	約2.8 m ²	2019年6月	工事
天水地区				
1	(天水山) 環境整備 (駐車場) 工事	約1,480 m ²	2019年6月	工事
三原地区				
1	(三原) 小学校埋設消火管漏水修理	約12.5 m ²	2019年9月	工事

件名の最後に*印を付したものは大学外の事業者が開発原因者である

具体的な協議は行わなかった (第1表・東広島地区47)。鏡西谷遺跡整備芝張り工事は遺跡保存工事で、2017年度からの継続事業である (第1表・東広島地区33)。工事内容に変更があり、変更届を提出した。その他に、東広島地区の附属幼稚園隣接地におけ

る教育活動に関わる協議を行った（第1表・東広島地区48）。附属幼稚園隣接地における教育活動は、陣が平城跡ほかの埋蔵文化財の所在地を含んでおり、日常的に掘削・盛土行為を含むことから、埋蔵文化財所在地の再確認と教育活動に伴う届出について協議を行った。なお、東広島地区については、東広島市教育委員会との協議に基づき、2018年度より、周知の遺跡以外の開発行為については広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門が協議に対して回答を行い、開発概要・回答などを四半期ごとに教育委員会にまとめて報告した。

協議に基づいて、発掘届（文化財保護法93条）8件を提出した。内訳は、東広島地区7件、三原地区1件である。学内協議のみの開発は霞地区1件のみで、（病）ロータリーアスファルト打替工事（第1表・霞地区6）である（東広島地区を除く）。東広島地区のががら山実証実験プロジェクトに伴う機器設置工事（第1表・東広島地区39）については年度内に工事が実施されなかったことから、立会調査等は次年度実施することとなった。このほか、東広島地区NTTドコモ基地局新設工事は、学外者が広島大学敷地の一部を借地し、施設等を設置するもので、広島大学外の事業者が工事主体である。

本年度の開発事業については、協議・届出回答等に基づき、本年度は合計15件54.5日の立会・試掘調査を実施した。内訳は立会調査14件46.0日の立会調査、1件8.5日の試掘調査である。

立会調査は、東広島地区で8件40.5日、霞地区2件3.5日、翠地区1件2.0日である。立会調査は、西日本豪雨災害に伴う復旧工事が行われたことと関連し、大半は東広島地区が占めた。東広島地区の11件のうち7件が関連工事で、実施日数も30.5日となった。陣が平災害復旧工事では幼稚園北地区と幼稚園駐車場東1地区で弥生土器が出土した。陣が平災害復旧工事幼稚園駐車場東2地区北端部は陣が平城跡に関連する遺構と考えられたことから、周辺部の地形測量を行い、陣が平城跡関連遺構への影響は最小限度となるよう工事を実施した。立会調査の範囲では、関連遺物がわずかに出土した。ががら地区災害復旧工事の北端部は鏡山城ががら地区の遺構に隣接し、南部は東ガガラ遺跡である。工事に伴って全域の立会調査を実施したが、遺構、遺物は確認されなかった。また、東ガガラ遺跡の範囲については、当初、流入土を撤去する予定であったが、協議を行い、表面を平坦化して、基本的に削平は行わないよう設計変更した。

霞地区では（霞）こすもす保育園給水管改修工事で旧広島陸軍兵器補給廠（支廠）の遺構と考えられるコンクリート構築物を検出した。検出遺構は現状保存し、配管ルートを変更した。翠地区の立会調査では遺構、遺物とも検出されなかった。

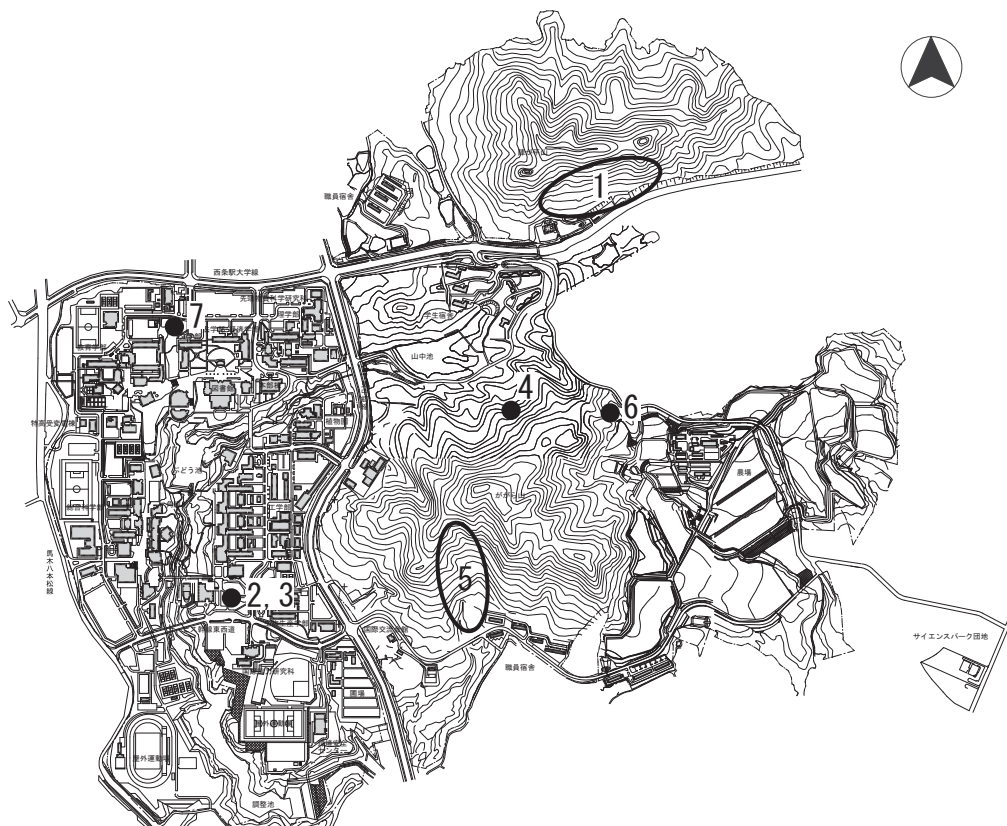
試掘調査 1 件は東広島地区の国際交流拠点施設建設に伴う調査である。遺構、遺物とも検出されなかった。

2. 試掘・立会調査の概要

次に、地区ごとに、試掘調査、立会調査の概要について述べる。

東広島地区（東広島市）

東広島地区では 8 件の立会・試掘調査を実施した。大半は立会調査であったが、国際交流拠点施設建設について試掘調査を実施した。新規建物建設に伴う遺跡確認調査である。このほか、後述の（東広島）ががら山等災害復旧工事（ががら職員宿舍西）で設計変更が困難な削平部分のうち、遺跡の範囲に含まれる場所の遺構・遺物の確認のため試



第 6 図 2019 年度東広島地区の試掘（立会）調査位置図（1 : 20,000）

1.（東広島）陣が平山災害復旧工事、2. 国際交流拠点施設建設、3. 東図書館改修工事、4.（東広島）ががら山等災害復旧工事（山中池南）、5.（東広島）ががら山等災害復旧工事（ががら職員宿舍西）、6.（東広島）ががら山等災害復旧工事（農場北西）、7.（東広島）文学部北側駐輪場取設等工事

掘調査を実施した。いずれも調査では遺構・遺物は確認されなかった。遺跡調査原因の半数は、2018年7月の西日本豪雨による災害復旧工事で、工事対象地は陣が平山およびががら山山麓部である。中でも（東広島）陣が平山災害復旧工事、（東広島）ががら山等災害復旧工事（ががら職員宿舍西）は工事規模が大きく、調査に多くの日数を要した。

1) 国際交流拠点施設建設

所在地 東広島市鏡山一丁目4番5号

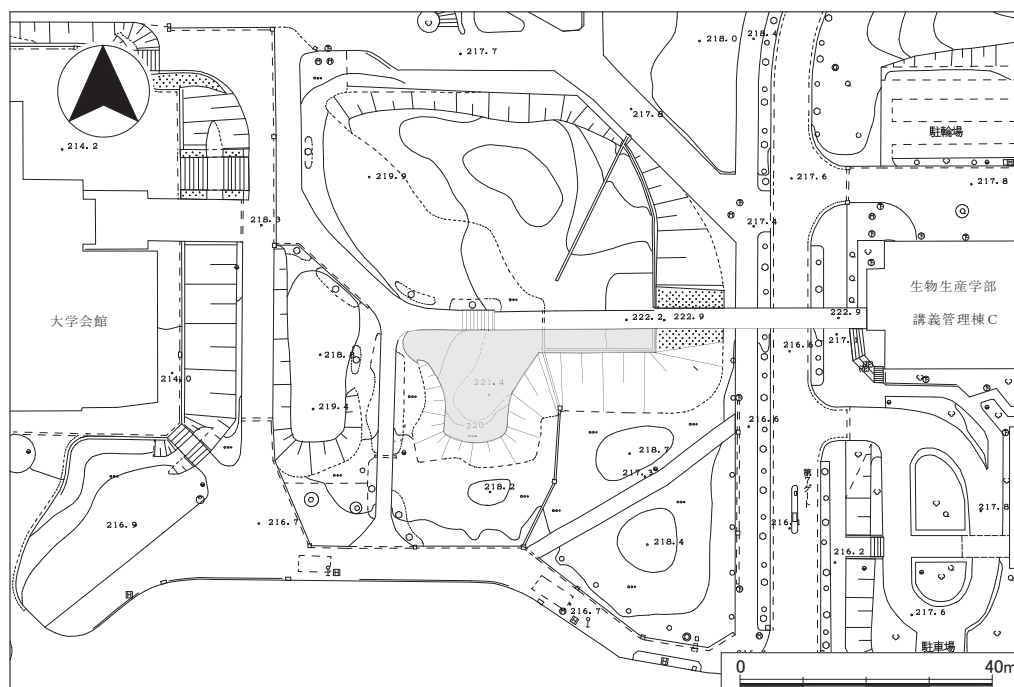
調査期間 2019（令和元）年5月24日～6月6日

調査面積 2,217 m²

調査者 藤野次史・石丸恵利子・梅本健治

調査概要 国際交流拠点施設予定地のうち自然地形が残されていると推定される範囲約310 m²を対象として試掘調査を実施した（第7図灰色部分）。調査期間は2019年5月24日～6月6日で、調査は延べ8.5日間である。

南西に緩やかに傾斜する丘陵状の平坦部と歩行者用通路（生物生産学部と大学会館を結ぶ通路）南側の東西に細長い平坦部の2ヶ所に調査区を設定して調査を実施した（第



第7図 国際交流拠点施設建設調査対象地位置図（1：1,200）

（灰色部分が調査対象地である。）

8 図)。丘陵状の平坦部は中央部に北東－南西方向の、幅約 1.5 m、長さ約 15 m の調査区を設定し、1 区とした。また、歩行者用通路南側の細長い平坦部は、植栽と水路の間に東西方向の、幅約 1 m、長さ約 15 m の調査区を設定し、2 区とした。

1 区 北側約 10 m について地表下約 1.1 m まで掘り下げた。堆積層は、以下のように、大きく 7 枚に区分した。

第 I 層 表土、暗褐色土

第 II 層 整地土、淡黄褐色土砂質土

第 III 層 盛土、8 枚に細分される（第 III a ～ III h 層、詳細は第 9 図凡例を参照）

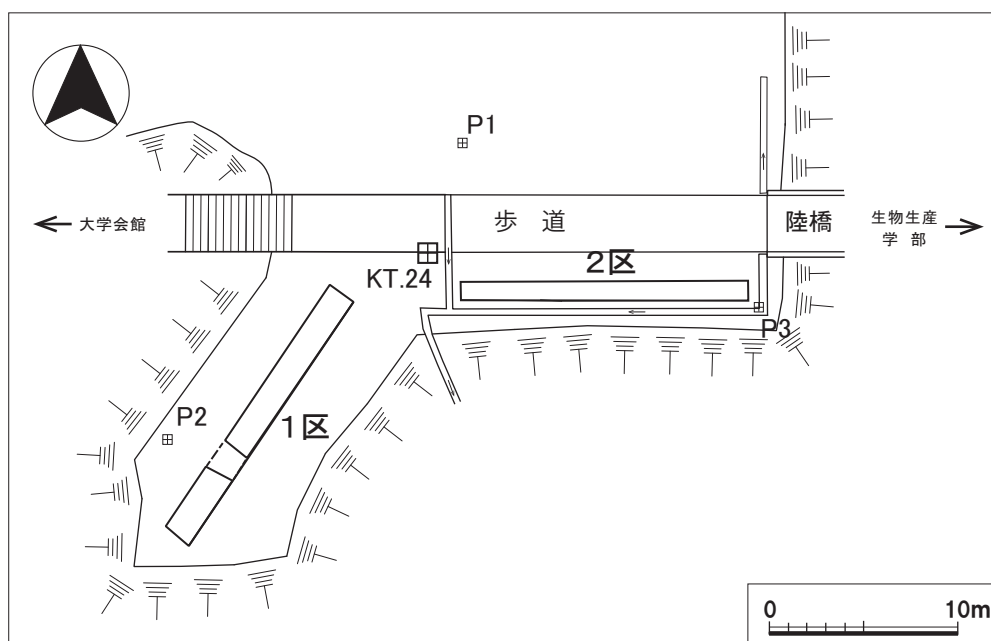
第 IV 層 旧表土、暗灰色粘質土

第 V 層 暗橙褐色粘質土

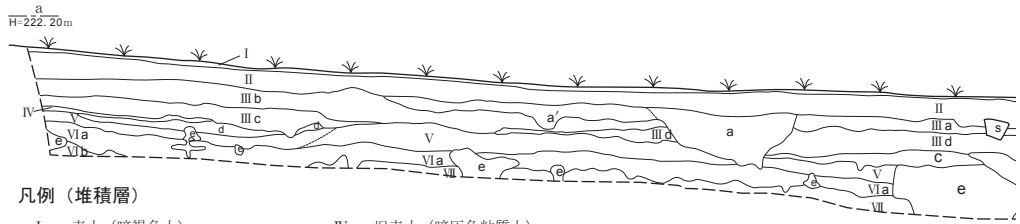
第 VI 層 黄橙褐色粘質土、2 枚に細分される

第 VII 層 淡青白色砂質土ほか

地表下約 0.4 ～ 0.5 m までは工事に伴う整地土、盛土（造成土）など（第 9 図土層断面図の第 II 層、第 III a ～ III e 層、a 層、b 層）で、その下層に自然堆積層が残されていた（写真 2-3・4）。自然堆積層は、橙褐色系粘質土（第 V 層、第 VI a 層、第 VI b 層）が主体で、東広島地区のこれまでの発掘調査で旧石器時代の遺物が検出された堆積層に



第 8 図 国際交流拠点施設建設試掘調査区配置図 (1 : 400)



凡例 (堆積層)

- | | |
|---------------------------|------------------------|
| I : 表土 (暗褐色土) | IV : 旧表土 (暗灰色粘質土) |
| II : 整地土 (淡黄褐色土砂質土) | V : 暗橙褐色粘質土 |
| III a : 盛土 (暗黄褐色土砂質土ほか) | VI a : 黄橙褐色粘質土 |
| III b : 盛土 (パラス層) | VI b : 黄橙褐色粘質土 |
| III c : 盛土 (橙褐色粘土ほか) | VII : 淡青白色砂質土ほか |
| III d : 盛土 (淡青白色粘土ブロックほか) | a : 掘削穴埋土 (橙褐色粘土ほか) |
| III e : 盛土 (明褐色真砂土ほか) | a' : 掘削穴埋土 (橙赤褐色粘質土ほか) |
| III f : 盛土 (橙褐色真砂土ほか) | b : 掘削穴埋土 (暗褐色粘質土ほか) |
| III g : 盛土 (橙褐色真砂土ほか) | c : 暗黄褐色粘質土 |
| III h : 盛土 (橙褐色真砂土ほか) | d : 黄灰色粘質土 |
| | e : 木痕 |

第9図 国際交流拠点施設建設



2-1 調査地点近景 (南西より)



2-2 1区調査風景 (南西より)

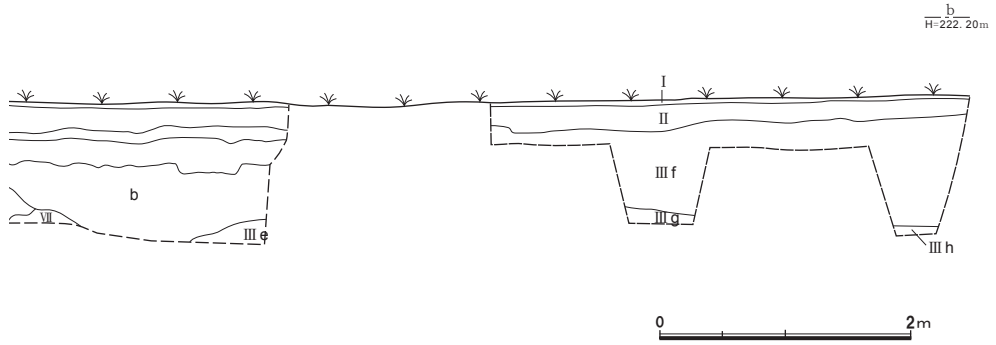


2-3 1区完掘状況 (北東より)



2-4 1区東壁セクション (北より)

写真2 国際交流拠点施設建設に伴う試掘調査 (1)



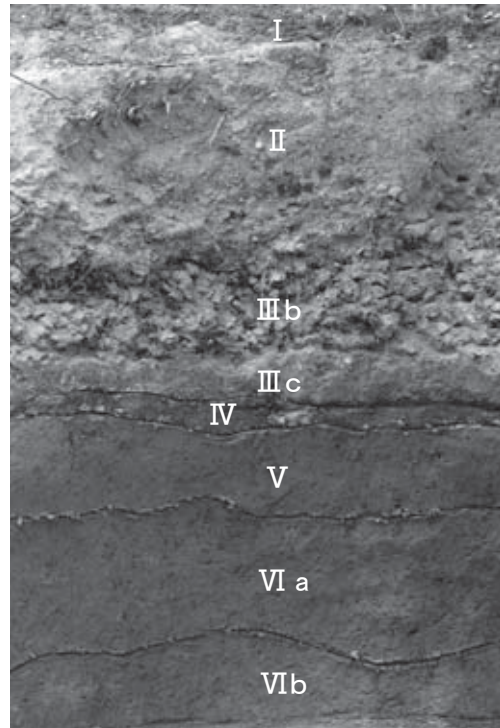
試掘調査 1 区東壁土層断面図 (1 : 60)



3-1 2 区完掘状況 (西より)



3-2 2 区南壁セクション (北東より)



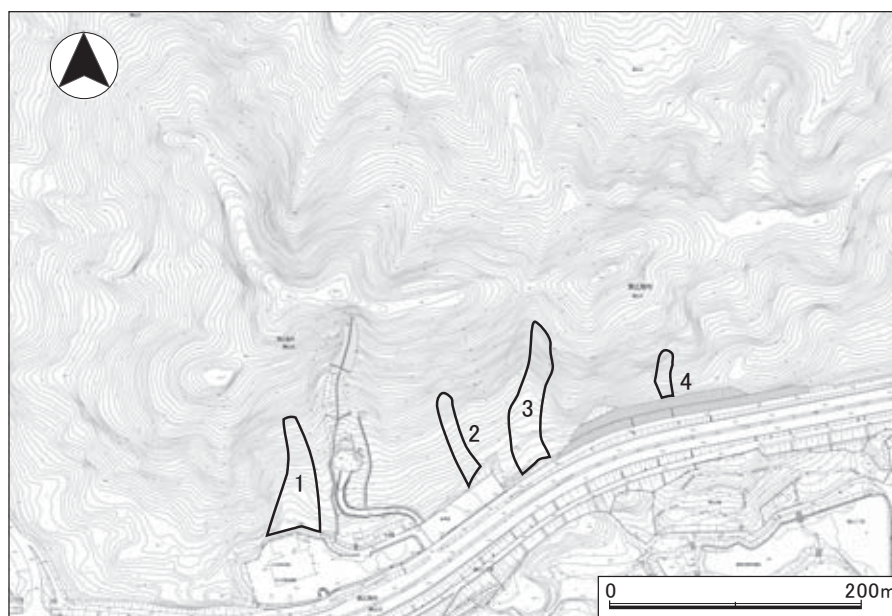
3-3 1 区東壁セクション土層堆積状況

写真 3 国際交流拠点施設建設に伴う試掘調査 (2)

対比される。1区北端部では旧表土と考えられる第IV層が認められたが、これまでの調査で縄文時代および縄文時代以降の遺構・遺物が検出された層に対比される堆積層は確認されなかった。また、北側から約8m付近より南側は工事に伴う掘削穴埋土や盛土（造成土）によって埋積され、調査範囲では自然堆積層がすべて削平されていた。調査区北端から約10～12mの範囲はサクラの木があり、調査を行わず、その南側約4m分を地表下約0.4mまで掘り下げた。すべて真砂土で、整地土、盛土（造成土）と判断されたことから、南北2ヶ所について部分的に地表下約1.1mまで掘り下げた。すべて黄褐色および橙褐色系の真砂土を主体とし、整地土、盛土と判断された（第II層、第III f層～第III g層）。これらのことから、調査区北端から約8mより南側は第V層、第VI層などの自然堆積層はすべて削平されたものと判断し、調査を終了した。

1区の自然堆積層他からは全く遺物、遺構は検出されなかった。

2区 全体を地表下約0.5mまで掘り下げたが、全て黄褐色系の真砂土であり、統合移転後の工事に伴う盛土（造成土）と考えられた。調査区西端部の一部を地表下約1.2mまで掘り下げたが、全て黄褐色系真砂土であり、旧地形がさらに下層に位置する、あるいは旧地形が削平された、のいずれかであると判断した（写真3-1・2）。人力で全体を1.2m程度まで掘り下げるのは調査区規模からみて困難であること、1m以上掘り下げても自然堆



第10図 （東広島）陣が平山災害復旧工事に伴う試掘（立会）調査区位置図（縮尺1：6,000）
 (1. 園舎北側地区 2. 幼稚園駐車場東1地区 3. 幼稚園駐車場東2地区 4. 幼稚園駐車場東3地区)

積層が認められない状況であることなどから、隣接する1区の状況から見て、遺物・遺構が残されている可能性がある堆積層は2区西半部では削平された可能性が高いと判断し、調査を終了した。

2区では自然堆積層は確認できず、遺物・遺構も検出されなかった。

2) (東広島) 陣が平山災害復旧工事

所在地 東広島市鏡山北 190-1 番地

調査期間 2019 (令和元) 年 7 月 30 日～2020 (令和2) 年 2 月 13 日

園舎北側地区 2019 年 7 月 30 日・31 日、8 月 2 日・7 日・22 日・26 日

幼稚園駐車場東 1 地区 2019 年 11 月・12 日～15 日・19 日・22 日・26 日

幼稚園駐車場東 2 地区 2019 年 10 月 28 日・30 日・31 日、11 月 1 日・5 日・19 日・
22 日

幼稚園駐車場東 3 地区 2020 年 1 月 30 日・31 日、2 月 4 日・5 日・13 日

調査面積 4,795 m²

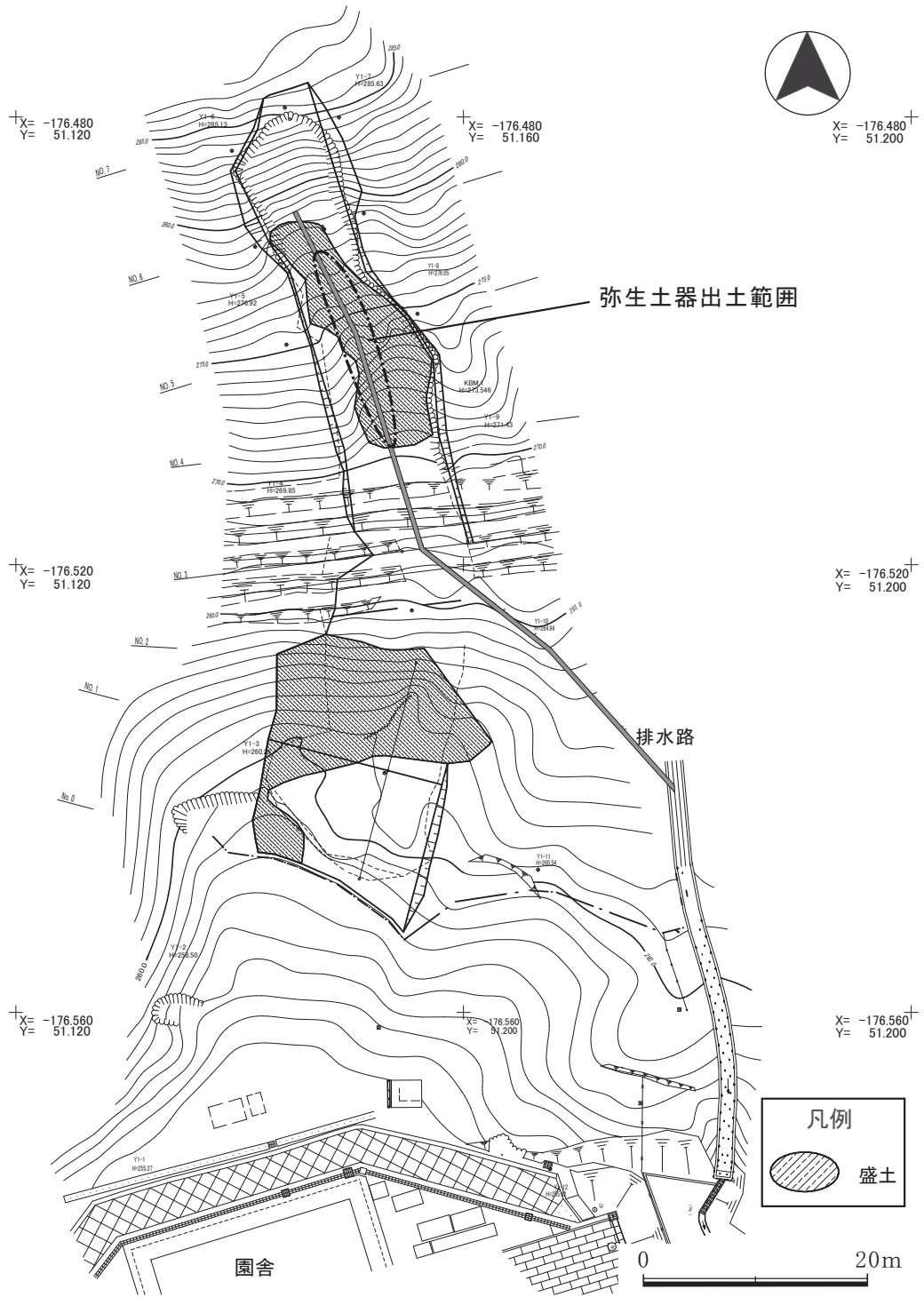
調査者 藤野次史 (園舎北側地区、幼稚園駐車場東 1 地区・3 地区)・石丸恵利子 (幼稚園駐車場東 2 地区)

調査概要 広島大学 (東広島) 陣が平山災害復旧工事に伴って試掘調査 (立会) を実施した。工事対象地は陣が平山の南斜面にあり、隣接地に附属幼稚園が位置している。工事は 4 地区に分かれており、西より、園舎北側地区、幼稚園駐車場東側 1 地区、同 2 地区、同 3 地区である (第 10 図)。

1. 園舎北側地区

幼稚園園舎の北側斜面に位置する西日本豪雨被災部分で、陣が平山中腹から園舎北側の広場付近までの範囲である (第 10 図 1)。陣が平城跡の郭や塹壕などの遺構は認められない場所であること、自然地形の掘削はほとんど行わず、流入土を平滑にする作業が中心となることから、調査区北端部の自然地形が残されている場所および排水路設置に伴う掘削についてのみ立会調査を行った。

調査区北端部は急傾斜であることから人力で成形を行った (写真 4-1)。流入土の整地が完了した後、排水路掘り方の掘削を行った (写真 4-3)。排水路は、当初、南北方向に直線的に設置する予定であったが、調査区北半部では中央部へ南北方向に設置し、調査区中央部で東側へ屈曲させ既設水路に接続して排水する配置に変更した。調査区中央部から東側水路に接続する排水路掘り方を最初に掘削した。長さ約 35 m、幅約 1.5 m、深



第 11 図 (東広島) 陣が平山災害復旧工事園舎北地区調査区平面図 (1 : 600)



4-1 調査区北端部掘削状況（南より）



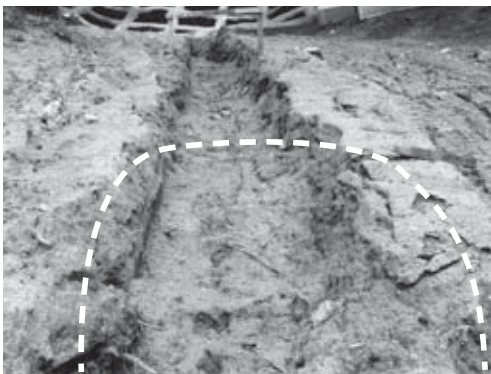
4-2 調査区北端部施工完了状況（南より）



4-3 成形完了状況（北西より）



4-4 調査区中央部排水路設置状況（東より）



4-5 調査区北部排水路掘り方完掘状況（南より）
（破線内が土器出土範囲を示す）



4-6 調査区北部～中央部排水路掘り方完掘状況
（北西より）
（破線内は土器の出土範囲を示す）

写真4（東広島）陣が平山災害復旧工事園舎北地区の試掘（立会）調査

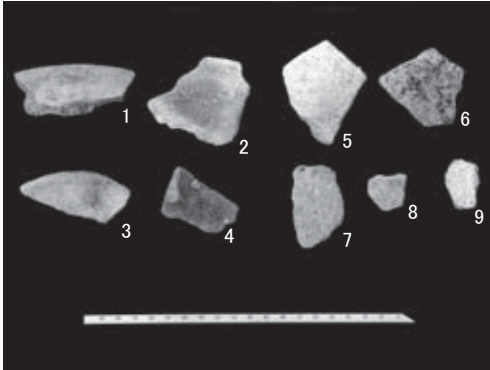
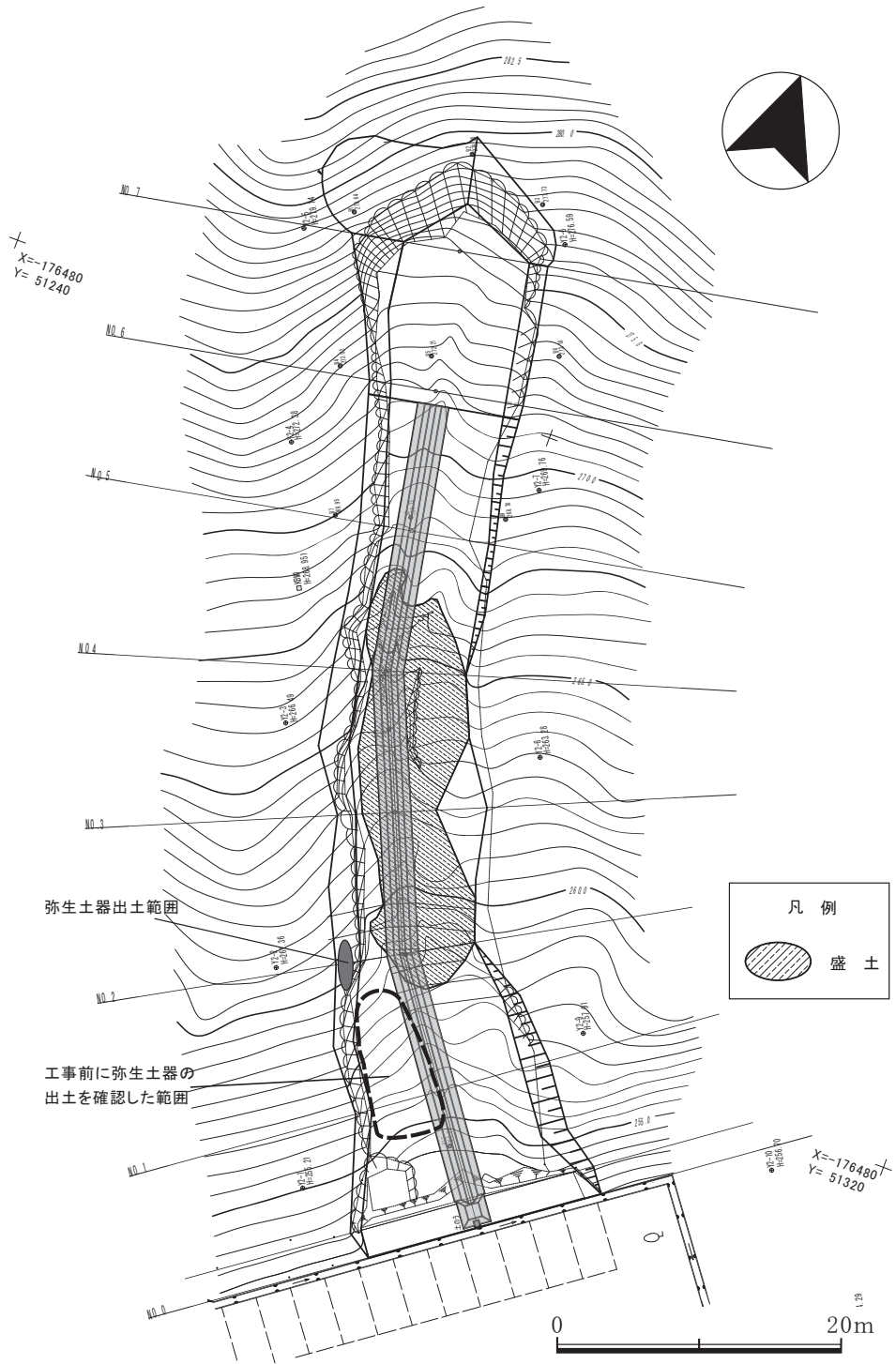


写真5 (東広島) 陣が平山災害復旧工事園舎
北地区出土弥生土器

さ約 0.5 m の規模で掘削したが、遺構、遺物とも検出されなかった(写真 4-4)。次いで、調査区北半部の南北排水路掘り方を長さ約 40 m、幅約 2 m、深さ約 0.4 m の規模で掘削した。南北排水路中央部付近の南北約 18.6 m の範囲で弥生土器が散漫に出土した(第 11 図一点鎖線内、写真 4-5・6 の白破線内)。掘り方は主として黄褐色系砂質土に掘りこまれていた。堆積層の大半はしまりが弱く、大部分は

上方からの流入土と思われる。掘り方底部は暗褐色粘質土で、弥生土器が包含されていることを確認した。排土から出土した弥生土器も基本的に暗褐色粘質土であった。弥生土器が出土した付近を精査したが、遺構は検出されなかった。弥生土器は掘り方の底部付近の堆積層を中心に出土していることを確認した。一帯は 30 度程度の急傾斜地であることから、遺構が存在するとすれば、階段状の平坦面を造成して構築した住居跡の可能性はあるが、現状の掘削下底面より下層への掘削は行わないことから、遺構確認作業は行わなかった。掘り上げた排土を精査するとともに、排水路設置後の掘り方埋め戻しの際にも遺物の回収に努めた。

出土の弥生土器は、壺形土器、甕形土器を主とする口頸部、胴部で、3 個体以上の破片である(写真 5)。1 は甕形土器の口頸部で、口縁部がくの字状に外反し、口縁端部を拡張して 3 条の凹線文を施文している。内外ともに横ナデ調整である。2 は壺形土器と思われる口頸部で、外面部は全面欠損している。口縁端部も下半を欠損しているが、上下に拡張して 3 条程度の凹線文を施していたものと推定される。3 は壺または甕形土器の口頸部で、2 同様に外面部を全面欠損している。口縁端部を拡張しており、現状で 2 条の凹線文を確認することができる。2・3 とも内面は横ナデ調整である。4 は比較的薄手の胴部破片で、外面は丁寧なナデ調整で仕上げている。内面は剥落が顕著であるが、部分的に残った壁面は丁寧にナデ調整されており、壺形土器の可能性はある。5～9 は胴部の小破片で、いずれも薄手である。器面の調整が不明瞭な個体が多いが、内外ともにナデ調整を主体としているようである。7 は内面をへら削り調整の後ナデ消していると思われる。6 は厚さ 4mm 程度の薄手の個体である。外面が大きく剥落しており、剥落部を含め外面に広く煤が付着している。甕形土器と思われる。



第 12 図 (東広島) 陣が平山災害復旧工事幼稚園駐車場東 1 地区調査区平面図 (1 : 500)



6-1 調査区北端部掘削前の状況（西より）



6-2 調査区北端部掘削状況（北西より）



6-3 調査区北部掘削・成形状況（北北西より）



6-4 西側法面（No. 3 - No. 4）完掘状況（東より）



6-5 西側法面（No. 5 - No. 6）完掘状況（北より）

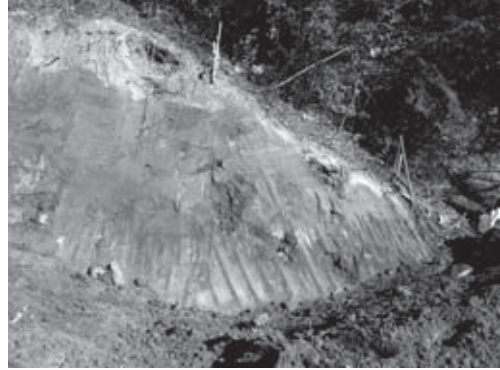


6-6 西側法面（No. 6 - No. 7）完掘状況（南東より）

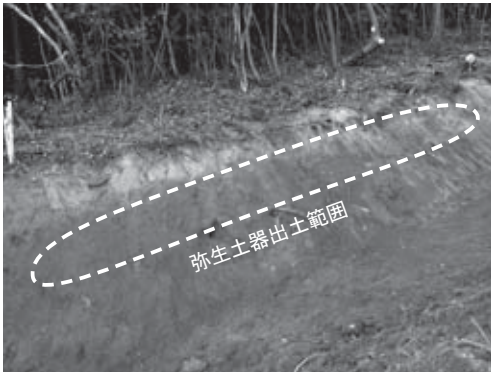
写真6（東広島）陣が平山災害復旧工事幼稚園駐車場東1地区の試掘（立会）調査（1）



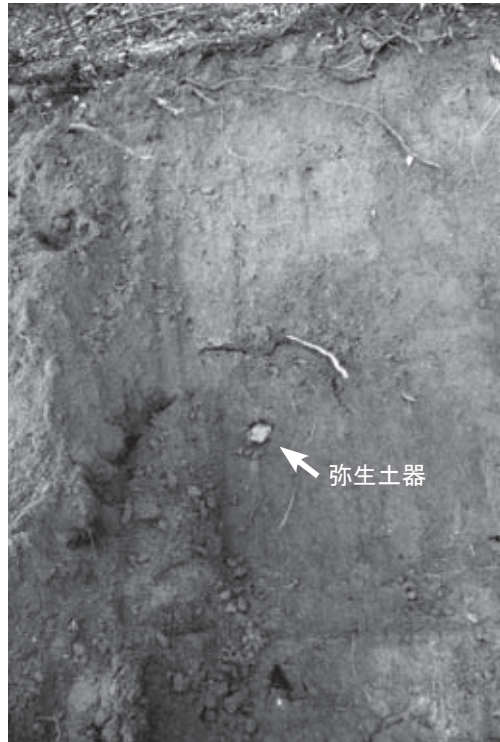
7-1 西側法面完掘状況 (No.2 -No.0) (北東より)



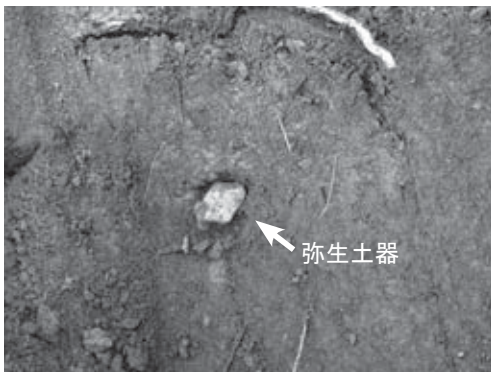
7-2 調査区北端部施工完了状況 (南より)



7-3 西側法面 (No.2 周辺) 完掘状況と弥生土器出土範囲 (東より、弥生土器は破線内出土)



7-5 No.2 周辺西壁堆積状況 (東より)



7-4 No.2 周辺西壁弥生土器出土状況 (東より)

写真7 (東広島) 陣が平山災害復旧工事幼稚園駐車場東1地区の試掘(立会)調査(2)



8-1 排水路掘り方掘削状況（南西より）



8-2 排水路掘り方掘削状況（南より）

写真 8（東広島）陣が平山災害復旧工事幼稚園駐車場東 1 地区の試掘（立会）調査（3）

2. 幼稚園駐車場東 1 地区

幼稚園園舎の東側に位置する駐車場東端部の北側斜面の西日本豪雨被災部分で、陣が平山山腹途中から駐車場北端境界部までの範囲である（第 10 図 2）。法面部はほぼ全域で自然地形を削平して成形するため、立会調査を実施した。また、地滑り部分の成形床面は、中央部を盛土による成形とする（第 12 図実線斜線＋破線斜線）他は、おおむね削平して成形するため、盛土以外の床面成形作業についても立会調査を実施した。地滑り部分全体の成形後は、中央部に掘り方を掘削して排水路を設置した。掘り方の掘削は、法面・床面造成の際の掘削深度より深くなる部分や盛土のさらに下層まで掘削する場合があることから、排水路掘り方掘削についても立会調査を実施した。

本地区は、工事に先立つ現地確認の際に調査区南部を中心に弥生土器が採集されたため、掘削作業に取り掛かる前に、土器採集範囲（第 12 図破線内）の周辺について、成形掘削の際に慎重な掘削を行うよう、工事責任者、バックホウ・オペレーターに依頼した。また、成形に並行して適宜削平面の精査を行った。なお、工事用の東西基線が設定されており、調査では基線を利用して記録を作成した。基線は南端部の No.0 から順次北側へ任意の間隔で設定されており、最北が No.7 である（第 12 図）。以下、例えば、本文中で「No.3－No.4」とあるのは、No.3 と No.4 の基線の間であることを示している。

斜面の成形は一定範囲の法面を成形したのち床面の成形を行い、順次下方に作業範囲を移動する形で進めた。北端の急斜面部は基本的に現在の斜面の地形を生かす形で成形を行ったため、東半部は地表からの深さ 10～20cm 程度の掘削に留まり（以下、同様の掘削に関しては「地表からの深さ」を省略する）、西半部についても深さ 30～50cm 程度

の掘削となった（写真 6-1・2）。No.7 - No.6 西側法面の北部は 10 ～ 20cm 程度の掘削に留まったが、中央から南部は 50 ～ 100cm の掘削を行った（写真 6-4 ～ 6、写真 7-1・2）。No.6 - No.5 西側法面は 50 ～ 100cm の掘削を行った（写真 6-5）。No.5 - No.4 西側法面は 50cm 程度、No.4 - No.3 西側法面は 50 ～ 100cm の掘削を行った。No.3 - No.2 以南の西側法面は 100cm 前後の掘削を行った。

東側法面は、北端部を除くと、No.7 - No.4、No.2 - No.0 の間を掘削した。No.7 - No.6 東側法面は 50 ～ 100cm の掘削を行った。No.6 - No.4 東側法面は 50 ～ 0cm の掘削を行い、南に向かって掘削深度は浅くした。No.4 - No.2 間は法面の掘削は行わず、一部は床面に盛土を行うため、法面部の現地地形の一部を埋積した。No.2 - No.1 東側法面北半部は 0 ～ 50cm の掘削を行い、南半部および No.1 - No.0 東側法面は 100cm 前後の掘削を行った（写真 7-2）。自然地形掘削幅は基本的には東側法面、西側法面とも 2 m 以内で、部分的に 3 ～ 5 m 程度掘削した場所もある。

床面は中央部（No.5 - No.4 中央付近から No.2 南側）の大半は周囲を削平した土で盛土し、床面を整えた。そのほかの部分は削平を行い、床面を平坦化した。所によっては 100cm 程度の掘削を行った場所もあるが、大半は 50cm 程度の掘削であった。

No.2 ライン付近から南側は工事前の現地確認で弥生土器を採集した（第 12 図破線部分）ことから、東西法面および床部分の成形に伴う掘削では、10 ～ 15cm 程度ずつ掘り下げを行った。西側法面の No.2 ライン付近を中心に西側法面で弥生土器が出土したため、法面部で包含状態を確認した。堆積層は、上層より、表土層、淡黄褐色砂質土、褐色粘質土（やや軟質）、暗赤褐色粘質土（粘性が強い）の順に堆積していた。弥生土器は基本的に褐色粘質土内に包含されていた（写真 7-3 ～ 5）。工事前に弥生土器を採集した範囲は床面西半部で No.1 ラインの南側まで広がっていたが、法面の掘削部分では No.2 ラインを中心に南北 2 m の範囲のみであった（第 12 図破線部分）。工事前に採集した弥生土器は、本来 No.2 ライン付近に包含されていたものが流土によって下方に押し流されたのであろう。法面、床面では遺構は確認できなかった。弥生土器の包含を確認した西側法面の西側（調査区外）には小規模な平坦面が存在し、関連遺構が遺存している可能性がある。

全体の成形の終了後、床面中央付近に南北の排水路掘り方を掘削した（写真 8-1・2）。掘り方は、幅約 1.4 m、深さ 0.7 m の規模で掘削した。調査区南端から調査区北端部までの総延長は約 40 m である。排水路掘り方掘削では遺構・遺物ともに検出されなかった。

調査では、上述のように、弥生土器が調査区南部で出土したほかは、遺構・遺物とも確認することはできなかった。出土の弥生土器は、壺形土器、甕形土器の口頸部、胴部、

底部と思われる、5 個体以上の破片である（写真 9）。1・2 は壺形土器の胴部上半で、同一個体と思われる。1 は肩部外面に櫛描き波状文を上下二段に施している。櫛描き文付近から下部は全面に丁寧なヘラ磨き調整を施しており、2 は全面にヘラ磨き調整が認められる。内面はヘラ削り調整の後丁寧にナデ消していると思われる。3 は壺または甕形土器の口頸部で、短い口縁部を大きく外反させ、口縁端部をわずかに肥厚させている。器面の剥落が顕著であるが、内外とも横ナデ調整と思われる。4 は比較的薄手の胴部破片で、壺形土器と思われる。外面は縦方向のヘラ磨き調整である。内面は器面剥落が著しく、調整は不明である。5 は壺形土器の頸部～肩部で、頸部に貝殻腹縁の刺突文を施している。内外ともに横ナデ調整で仕上げ

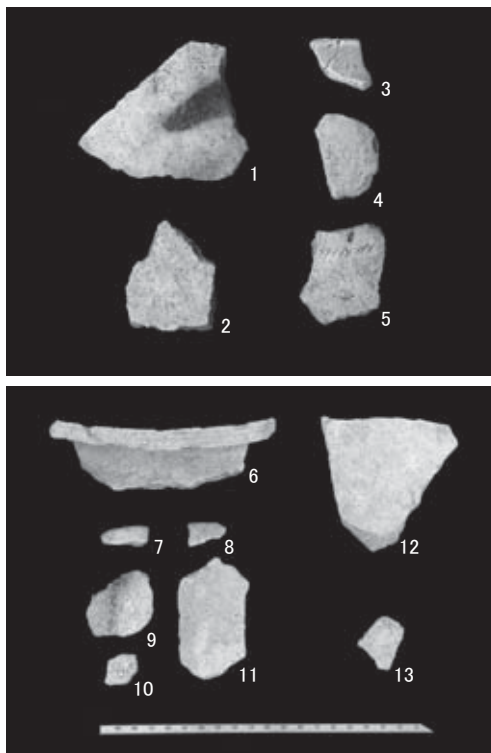


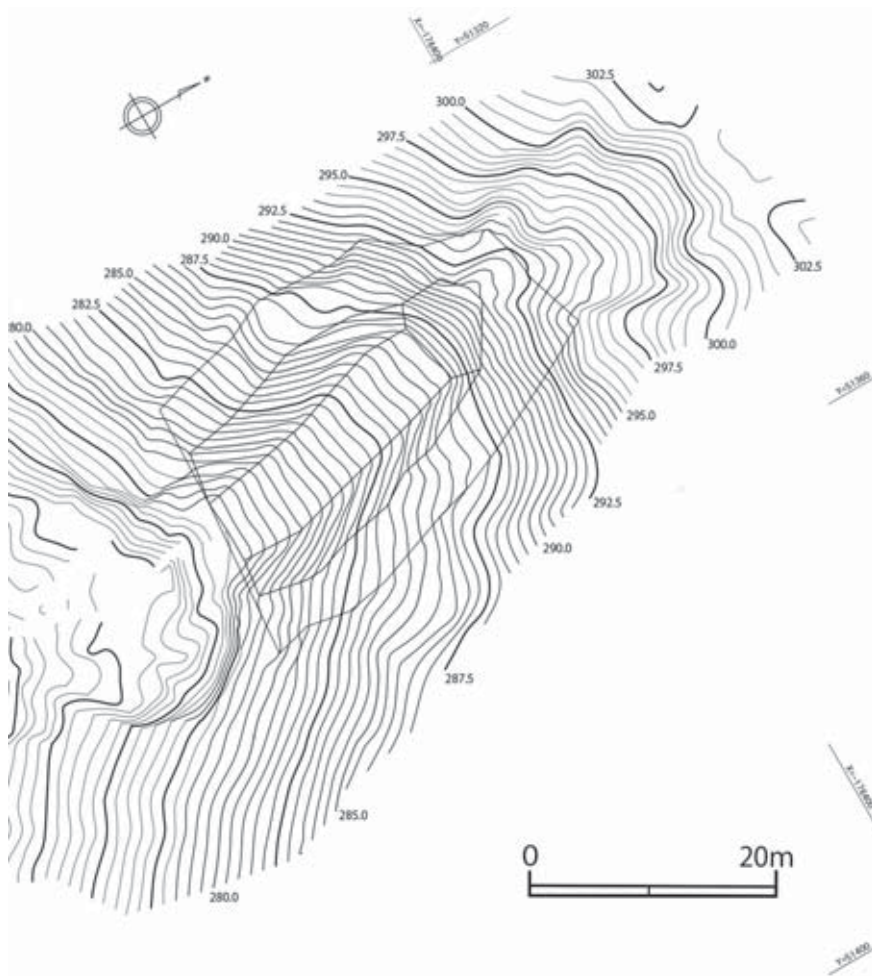
写真 9（東広島）陣が平山災害復旧工事幼稚園駐車場東 1 地区出土弥生土器

ている。6 は口頸部で、口縁部が大きく外側に開き、口縁端部を拡張して 3 条の凹線文を施文している。内外ともに横ナデ調整である。7・8 は甕または壺形土器の口縁端部の破片で、端部を拡張しており、7 は 3 条の凹線文を施している。8 は欠損部が多く、詳細は不明であるが、2 条の擬凹線文を施しているものと思われる。9～12 は壺形土器の胴部と思われる。9 は底部に近い胴部下半の破片である。器面の剥落が著しく、調整は不明である。10 は薄手の小破片で、内外ともにナデ調整と思われる。11 は外面は縦方向のヘラ磨き調整を施し、内面はのヘラ削り調整の後ナデ消している。12 は胴部下～底部の破片であるが、底は残っていない。外面はヘラ磨き調整、内面はナデ調整を主に一部ヘラ削り調整が残されている。

なお、調査区北端部の北東側（調査区隣接地の山林内）で小規模な石切り場を確認した。石切り場の南側には運搬に使用したと推定される道が斜面下方（南側）に伸びており、割残しと思われる集石も認められた。

3. 幼稚園駐車場東 2 地区

幼稚園駐車場東 1 地区の東側の豪雨被災部で、陣が平山山頂近くの尾根から少し下っ



第 13 図 (東広島) 陣が平山災害復旧工事幼稚園駐車場東 2 地区調査調査区平面図 (1 : 600)
 (地形成形後は北端のみ測量を行った。図左側は崩落時の地形図の一部であるため、等高線が不連続の部分がある。国土座標値は世界測地系)

た山腹から東広島市道（ブルーバール）北側の歩道付近までの範囲である（第 10 図 3）。

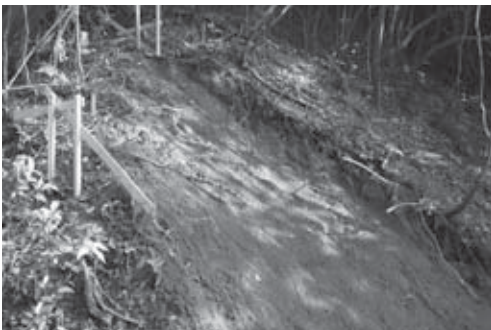
工事は、南北約 120 m、東西 15 ～ 30 m の範囲で、崩落斜面の壁面を掘削して傾斜をなだらかに成形し、流出した土砂は斜面底部や山裾部に盛土をする形で行われた（写真 10-1）。工事地点の北端周辺は、山城（陣が平城跡）関連遺構が残ると考えられることから注視して立会を行った（写真 10-2）。現在の地形からみると豎堀あるいは切岸となっていたと可能性が考えられる。さらに山頂方向は土橋の可能性もある。北端斜面の掘削において、西側斜面は現在の地形をあまり掘削しない状態で削平が行われ、上層から固い地山の花崗岩が風化した目の粗い真砂土（白系褐色土）であった。北端から東側斜面にかけては、



10-1 災害状況全景（南より）



10-2 災害箇所北端崩落状況（南より）



10-3 北端斜面掘削成形状況（西より）



10-4 北端斜面成形と堆積状況
(破線は褐色土と真砂土の境界線)



10-5 北端掘削成形後全景（南より）



10-6 災害箇所掘削成形後全景（南より）

写真 10（東広島）陣が平山災害復旧工事幼稚園駐車場東 2 地区の試掘（立会）調査（1）



11-1 流路工北側掘削状況（南より）



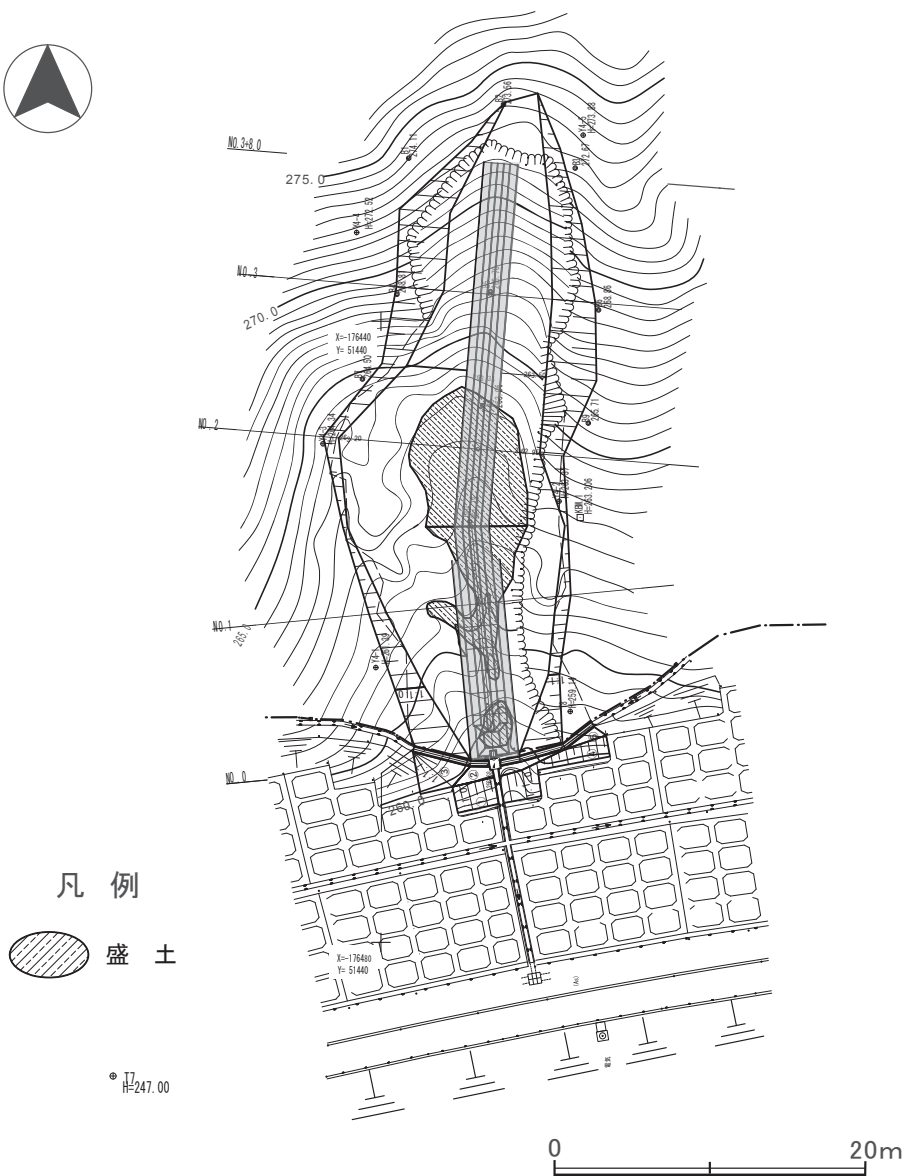
11-2 流路工南側集水柵部掘削状況（南西より）

写真 11（東広島）陣が平山災害復旧工事幼稚園駐車場東 2 地区の試掘（立会）調査（2）

黄褐色土の堆積であることを確認した(写真 10-3)。北端斜面では、地表から約 1.5 m 下(底部から上に斜面距離で約 4 m 地点)で真砂土と上部の褐色土との境が確認できたが、東側にどのように伸びるかは不明瞭であった(写真 10-4)。西側についても斜面上での観察のため、明瞭ではない。また、出土地点については把握できなかったが、北端から東壁面にかけての掘削土より瓦質の挿鉢底部片を 1 点のみ採取した(本号研究編参照)。

また、底部についてはほとんど掘削されていないが、成形後の底部北端から南に約 5 m 地点から南東方向(東側斜面に至る)にかけて水がしみ出る状況で、非常にしまりが緩く、やや暗い褐色粘質土の堆積が確認された。一部を深く掘り下げると西側壁面で確認された真砂土の堆積が認められ、その上に粘質土が堆積しているようであった。東斜面内にも伸びると考えられるが、壁面に達する辺りではその上部に固く締まった黒褐色土の堆積も認められたが、遺物等は確認されなかった。北端から約 22 m の間は底部幅約 7 m、斜度約 45 度に成形された。それ以南については、西側斜面は高さ 1～2 m 程度の掘削で、東側は高い部分で約 5 m から斜面を成形した(写真 10-5)。底部については盛土によって成形された(写真 10-6)。その間で、遺物・遺構は確認されなかった。北端部分については工事業者によって測量を実施し、成形後の地形を記録した(第 13 図)。

全体の成形後、北端から約 30 m 南の地点から南端の歩道までの約 90 m の区間に流路を設置する掘削も加えて行われた。北側は東寄り部分において、幅約 0.5 m で深さ約 0.3 m の U 字溝設置のための掘削が行われ(写真 11-1)、また、南端には集水柵を設置するために、約 3 m 四方で深さ約 0.8 m の掘削が行われた。柵設置部分は、堆積の上部が災害時の土砂とそれによる盛土に相当するが、下部も水分を多く含む非常に緩い粘質土であり、北側の湧水から続く地下水の流路に相当すると考えられる。掘削範囲において、遺物・



第 14 図 (東広島) 陣が平山災害復旧工事幼稚園駐車場東 3 地区調査区平面図 (1 : 500)
(一点鎖線の北側 (図上部) が調査対象地である。)

遺構は確認されなかった。

4. 幼稚園駐車場東 3 地区

幼稚園駐車場東 2 地区の東側に位置する豪雨被災部である (第 10 図 4)。陣が平山中腹から市道 (ブルーバール) 北側の歩道法面上端付近までの範囲である。今回の災害復旧工事の中では最も小規模で、長さ (南北) 約 40 m、幅約 16 m の規模である。



12-1 調査区全景（北より）



12-2 調査区北端部掘削状況（西より）



12-3 調査区北東部法面掘削状況（北西より）



12-4 西側法面(No.0+5 - No.1)掘削状況（東より）



12-5 調査区南西端部掘削状況（北東より）



12-6 成形完了状況（北より）

写真 12（東広島）陣が平山災害復旧工事幼稚園駐車場東3地区の試掘（立会）調査（1）



13-1 調査区南部排水路掘り方掘削状況（北西より）



13-2 排水路掘削状況全景（北より）

写真 13（東広島）陣が平山災害復旧工事幼稚園駐車場東3地区の試掘（立会）調査（2）

北端部をのぞく北半部（No.2ライン以北）は50～100cmの掘削を行った（第14図）。No.3中央～No.2中央の間がもっとも掘削量が多く、100cm前後の掘削を行った（写真12-2・3）。南半部（No.2ライン以南）はおおむね50cm以下の掘削であったが、南に向かって掘削深度を増し、南端では100cm近い掘削を行った（写真12-4・5）。東西法面の自然地形掘削は幅1m程度であった。

床面は、中央部に盛土したほかは、全体を掘削し平らに成形した。No.2ライン付近では法面下を中心に50～100cm程度の掘削を伴ったが、おおむね50cm以下の掘削であった。

床面の成形後、中央部に排水路掘り方を掘削した（写真13-1・2）。南端から北へ約13mまでは幅2.3m、それより北側は幅約1.3mの規模で掘削した。傾斜が比較的緩やかな南端から約15m付近までは深さ約1m、急斜面部の中央～北半は深さ約50cmの規模で掘削した（写真13-2）。傾斜の緩やかな調査区南半では、土層上部は盛土および褐色系砂質土で、下半部で褐色系粘質土が見られた。急傾斜の調査区北半部はおおむね花崗岩岩盤及び花崗岩風化層であった。

遺物、遺構ともに確認されなかった。

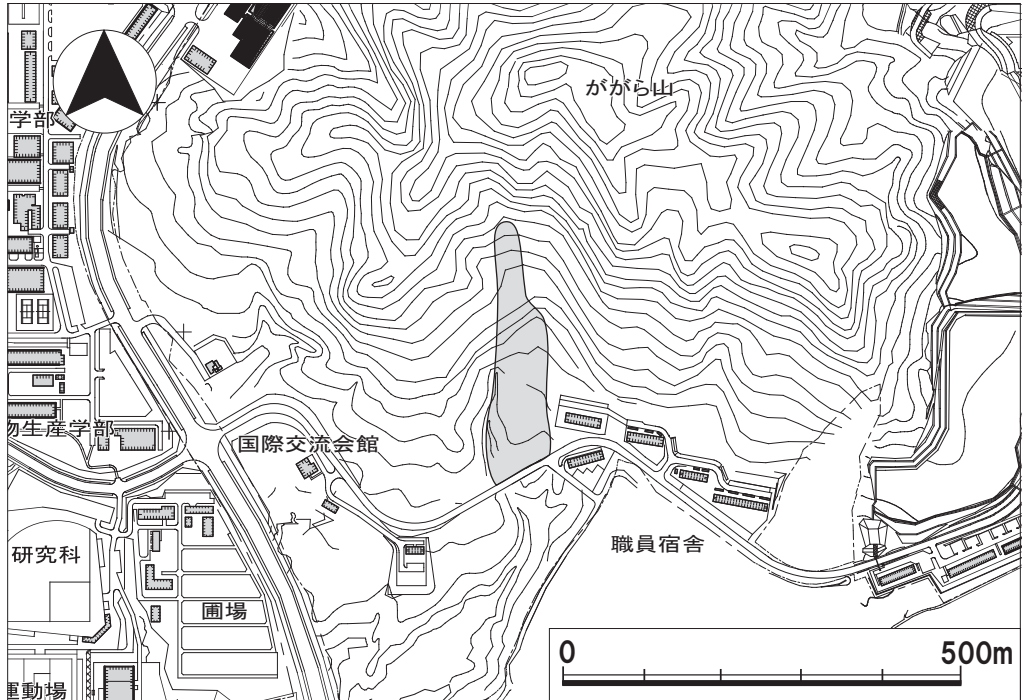
3）（東広島）ががら山等災害復旧工事（ががら職員宿舎西）

所在地 東広島市鏡山二丁目365番地

調査期間 2019（令和元）年9月27日・30日、10月3日・4日・7日・9日～11日・15日～18日、11月5日・11日・13日・14日・20日、12月10日

調査面積 12,835.65 m²

調査者 藤野次史・梅本健治

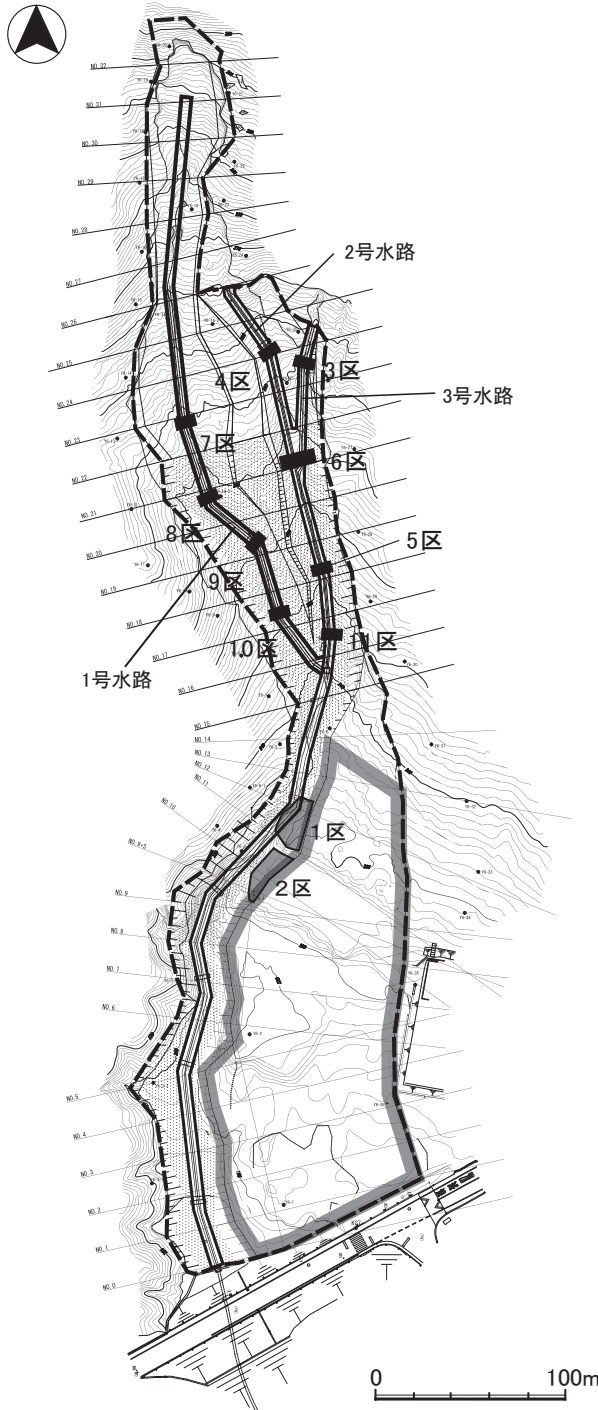


第 15 図 (東広島) ががら山等災害復旧工事 (ががら職員宿舎西) 調査区位置図
(灰色部分が調査区の位置である)

調査概要 広島大学 (東広島) ががら山等災害復旧工事 (東ガガラ遺跡) に伴って試掘調査 (立会) を実施した (第 15 図)。

工事は、地滑り部分及び周辺斜面の成形 (法面および床面の造成)、地滑り部分成形部 (床面) への水路・暗渠排水設置である (第 16 図)。地滑り部分南部に東ガガラ遺跡が位置している (第 16 図太灰色線で囲まれた場所)。遺跡の範囲については、当初土石流堆積物をすべて撤去する予定であったが、協議の結果、遺跡への影響を考慮して、土石流堆積物表層部の流木の撤去、表層部の整地のみとした。流木の撤去の際には多少の掘削を行ったが、基本的に土石流堆積物内での掘削であった。旧地形の掘削を行うことなく、土石流土を平滑に均したことから、試掘調査は実施しなかった。また、水路設置は、東ガガラ遺跡隣接部では既存の谷地形をそのまま利用して設置した。遺跡北端部で一部遺跡の範囲内の掘削が必要であることから、試掘調査を行った (詳細は後述)。試掘調査を行った場所より南部については、既存の谷地形内での掘削であり、立会調査のみとした。調査の結果、遺構・遺物ともに検出されなかった。

以下、地滑り部分及びその周辺の成形工事と水路・暗渠排水造成工事に分けて調査概



第 16 図 (東広島) がら山等災害復旧工事 (がら職員
 宿舎西) 調査区配置図 (1 : 4,000)
 (太破線が調査区、太灰色線は東ガガラ遺跡の範囲である)

要を述べる。

1. 地滑り部分及びその周辺の 成形成 (造成) 工事

地滑り部分には、自然流路が 3 本あり、途中で合流しながら、調査区 (工事対象地) の中央付近で 1 本の流路となって、合流後は調査区西端沿いを南流していた。自然流路により小規模な谷が形成されていたが、土石流によって調査区北半部については谷地形がほとんど埋没した状態であった。元々の自然流路への供給水が複数個所で湧水となり、小規模な流路が形成されていた。調査区南半部は、南端の農場連絡道が砂防堤の役目を果たし、南端部の全域に流土・岩や流木が厚く堆積していた。地滑り部については新たに形成された流路も含めて表土を平滑に成形成した。合わせて周辺部分の自然地形を削平して安全勾配を確保した。地滑り部の掘削はおおむね深さ 1 m 以内で、盛土部分もかなりある。周辺の法面形成部は、自然地形を基本的に全域で掘削し、調査区中央部付近では表土下深さ (高さ) 3 ~ 4 m まで掘削した。法面部分の自然地形は元々比較的急傾斜であった



14-1 調査前の調査区全景（北より）



14-2 調査前の調査区全景（南西より）



14-3 調査区北端部掘削前の状況（南より）



14-4 調査区北端の掘削状況（東より）



14-5 調査区北端部掘削状況（東より）



14-6 調査区北端部（No.32-30 付近）床面削平状況（北西より）

写真 14（東広島）ががら山等災害復旧工事（ががら職員宿舎西）に伴う試掘（立会）調査（1）

ため、実際の掘削は 50cm 前後が主体で、法面基底部付近では 2 ～ 4 m 程度掘削した場合もある。

調査記録は工事用に設定された No.0 ～ No.32 の東西方向の基線を利用した。以下、例えば、「No.10 - 8」は No.10 基線と No.8 基線の間範囲を示している。

調査区北端及び北部 (No.32 - 26) 成形作業は北端部から順次南側へ実施し、法面の造成の進行に応じて周辺の地滑り部分の床成形を行った。調査区北端部については鏡山城跡ががら地区の遺構に隣接していることから、工事に先立って地表調査 (観察) を行った。切岸の可能性のある急斜面について掘削前の状況を写真撮影し、業者が作成した 1/250 の地形図を利用しながら現地を確認した。その結果、地滑りの外周にわずかに稜線が認められた。以前の土砂崩れ (地滑り) の痕跡の可能性があり、等高線も微妙に窪んでいる様子をとらえることができた。また、急傾斜の斜面裾付近に平坦部が確認できた。なお、上述の平坦部から連続して、谷側にわずかに平坦な面が認められたが、おそらく地滑り (土石流) 発生前の谷と斜面の境界部がわずかに残っているものと判断した。

法面の成形はバックホウを使用し掘削した。掘削は北端から行った。No.32 以北が北端の急傾斜の法面で、No.32 付近が急斜面の掘り底である。法面の傾斜は現状斜面の傾斜に近いことから、掘削は表層土を削平する程度で、高木樹根部のみ 50cm 前後で掘削した。ただし、急傾斜削平面下底近くは少し掘削量が多く、1 m 前後の掘削を行った (写真 14-3 ～ 5)。

No.32 ～ No.28 付近は、法面造成に関して、東西幅 3 ～ 5 m 程度の自然地形掘削を行った (東側の No.29 - 28 間は基本的に現地地形のまま、ほとんど掘削しなかった)。掘削深度は、東側法面の No.32 - 30 は 5 m 程度、No.30 - 29 は 3 ～ 4 m 程度、No.29 - 28 は 2 m 程度、西側法面の No.32 - 31 は 1 m 程度、No.31 - 30 は 1.5 m 程度、No.30 - 29 は 2 m 程度であった。地滑り部分 (床面) は現状地形を削平、盛土しながらほぼ平坦に造成し、法面下底は床面に合わせる形で掘削した (写真 14-6)。床面の掘削は現状地形をおおむね深さ 0.5 ～ 2 m 程度まで掘削し、中央部付近は深さ 1 ～ 2 m まで掘削した。東側法面部では広い範囲で花崗岩が露出し、No.31 - 30 付近に谷堆積土と思われる暗灰色～灰黒色土が広く露出した (写真 15-2)。花崗岩はほぼ一つながりであり、岩盤と思われる。岩盤北端は斜めに傾斜し、岩盤の傾斜に沿って黄褐色土が厚く堆積し、その北側に谷堆積土と考えられる暗灰色～黒灰色土が堆積していた。西側法面では No.32 付近、No.29 - 28 間で埋没谷を確認した。No.32 付近は暗灰色～黒灰色土が堆積し、湧水していた。法面に連続する谷地形は北北東方向へ直線的に伸びており、鏡山城跡 (がら地区)



15-1 調査区北部 (No.26-25 付近) 西側法面掘削状況 (東より)



15-2 調査区北部 (No.31-30 付近) 東側法面掘削状況 (東より)



15-3 調査区北部 (No.16-15 付近) 東側法面掘削状況 (北より)



15-4 調査区北部 (No.28-26) 西側法面完掘状況 (北より)



15-5 調査区北部 (No.25-24) 西側法面完掘状況 (北より)



15-6 調査区北端部 (No.23-19 付近) 西側法面および床面削平状況 (北東より)

写真 15 (東広島) ががら山等災害復旧工事 (ががら職員宿舍西) に伴う試掘 (立会) 調査 (2)

の郭（遺構は未確認）直下まで連続している。谷の形状は比較的良好に残っており、斜面に対してやや西に傾斜しているが、堅堀の可能性もある。No.29 - 28 間は伏流水となって旧自然流路に流入していたものと思われる。

No.28 - 26 付近は、法面造成に関して、西側は幅 1 ~ 2 m で自然地形の掘削を行った（写真 15-4）。東側は No.27 - 26 で 0.5 ~ 5 m 幅で掘削を行ったが、そのほかは基本的に現状のままでほとんど掘削は行わなかった。掘削深度は西側が 0.5 ~ 2 m 程度であった。東側は No.26 付近を 0.5 m 程度掘削したが、基本的に掘削は行わず、部分的には若干の盛土を行った。床部分は、法面の掘削土をいったん盛りあげ、順次斜面下方（南側）に向かい成形を行ったため、詳細は不明であるが、現地表から 0.3 ~ 1 m 程度の掘削を行ったと考えられ、窪地部分を中心に盛土を行った。また、No.26 付近から、東側で新たな地滑り部分が始まっており、調査区が東側へ大きく広がっている。新たな地滑り始まり部分の北側についても幅 2 m 前後、深さ 1 m 程度の掘削を行い、法面を造成した。

調査区中央部（No.26 - 15） No.26 - 15 では、法面造成に関して西側は幅 2 ~ 3 m（ただし、No.20 - 18 は幅約 4 m）、東側は、No.26 - 21 は幅 2 ~ 4 m、No.21 - 15 は幅 3 ~ 9 m の規模で自然地形を掘削した。掘削深度は、西側 No.26 - 25 は深さ 1.5 ~ 2.5 m であるが、おおむね 2 m 前後の掘削を行った（写真 15-1・5・6）。東側は No.26 - 19 は深さ 1 ~ 2 m、No.19 - 15 は深さ 2 ~ 4 m で、比較的大規模に掘削を行い、とくに No.18 - 16、No.15 北半は自然地形を幅 5 m 前後、深さ（高さ）3 ~ 4 m の規模で掘削した（写真 16-5・6、写真 17-1 ~ 4）。床部分は、No.26 以北と同様、工法の関係から詳細に確認することはできなかったが、西側の自然流路域は現地表から 1 m 前後の掘削であったと考えられる。東側の自然流路域の掘削は法面基底部付近を中心としており、床部分での掘削はわずかで、大半は法面掘削土で盛土し、平坦に成形した。また、床部分の中央部（西側旧自然流路と東側旧自然流路の中間部）は現地表を平滑に均し、新たに設置する水路の形状に沿って法面を造成した。西側の旧自然流路部は掘削深度 1 ~ 2 m、東側の旧自然流路部の掘削深度は 0.5 ~ 1 m 程度の掘削を行った。堆積層は上部 0.5 ~ 1 m が土石流堆積物と思われ、それ以下は谷の自然堆積層と思われた。

西側法面では、No.23 - 21 で埋没谷と考えられる谷堆積土（暗灰色～黒灰色粘質土・シルト）を確認した（写真 15-6）。伏流水となって既存の自然流路に流入していたものと思われる。No.25 - 23 の西側（上述の埋没谷北側）で石切り場に関連する遺構を確認した（写真 21-4）。斜面側を削平して平坦面を造成し、平坦面縁辺に切石を並べていた。周囲には石を成形した際の碎石と思われる岩片が多数分布しており、成形済み、あるいは成形



16-1 調査区北部 (No.27-26 付近) 中央部水路
東側法面掘削状況 (北より)



16-2 調査区中央部 (No.24-23 付近) 中央水路
東側法面完掘状況 (西より)



16-3 調査区中央部 (No.24-23 付近) 中央水路
東側法面完掘状況 (西より)



16-4 調査区東端部 No.23-22 水路 2・3 掘り方西
側法面完掘状況 (東より)



16-5 調査区東端部 No.24-23 水路 2・3 掘り方東
部法面完掘状況 (西より)



16-6 調査区東端部 No.23-22 水路 2・3 掘り方東
部法面完掘状況 (西より)

写真 16 (東広島) ががら山等災害復旧工事 (ががら職員宿舎西) に伴う試掘 (立会) 調査 (3)

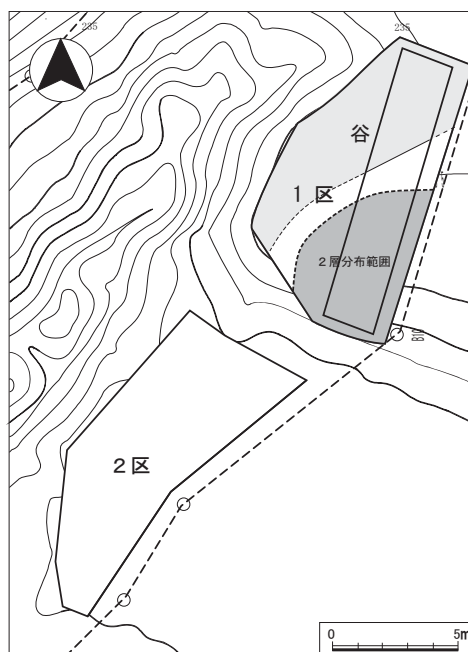
途上の割石も周辺部に散乱していた。斜面上方の丘陵平坦部直下に石切り場があり、そこから切り出した石を成形していた場所と考えられ、小屋程度の簡単な建物が存在した可能性が高い。石切り場に通じる山道も痕跡的ではあるが確認することができた。このほかに、西側法面では、No.19 - 15 で花崗岩岩盤を確認した。No.19 - 18 の法面下底部で連続的に広がる花崗岩岩盤を確認した。No.18 - 17 は掘削深度がやや浅いため岩盤はほとんど確認できなかったが、No.17 - 16 で再び岩盤が露出し、No.15 まで広がっていた。また、東側への岩盤の広がりを確認し、No.16 - 15 付近は予定の掘削深度に達していなかったため削岩機で岩盤を掘り下げた。

東側法面では、No.19 - 18、No.16 - 15 で埋没谷と考えられる谷堆積土（暗灰色～黒灰色粘質土・シルト）を確認した（写真 17-3）。伏流水となって既存の自然流路に流入していたものと思われる。

調査区南部（No.14 - 0） 東ガガラ遺跡の範囲であり、調査区西部の自然流路部を除き、現地形の凸凹を均す程度で掘削は行わなかった。東側縁辺部は表土をバックホウのバケット平坦部によるなでつけを行い、部分的に周辺の表土を均して出た土を押し広げた。西側は自然流路とそれに伴う谷地形で、自然流路部に水路造成を行ったが、基本的に掘削は谷内にとどまった。しかし、No.12 - 9 付近は水路掘り方造成に伴って平坦部が削平されることから試掘調査を実施した。

試掘対象地は、広島大学移転前には耕作地として利用されていた場所（完掘後、断面で確認したところによると、水田耕作土、床土は確認されなかったことから、耕作地は水田ではなく畑と考えられる）で、平坦に造成されていた。北側の耕作地を1区、南側の耕作地を2区とし、旧地形の残存状況および遺構・遺物の有無を確認した（第17図）。調査は主としてバックホウを利用して行った。

1区 No.12 - 11 に位置し、南北約12m、東西約6.5mの平面台形状の調査区である（第17図1区）。現状の地表から約10cm ずつ掘り下げ、遺構・遺物の有無ならびに土層堆積



第17図 調査区南部（東ガガラ遺跡）試掘調査区配置図（1：300）



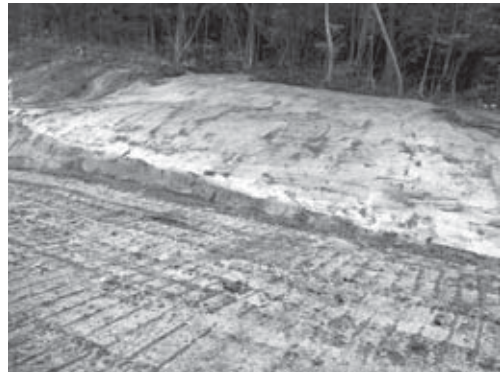
17-1 調査区東端部 No.21-20 水路2・3掘り方東部法面完掘状況（西より）



17-2 調査区中央部（No.20-19付近）中央水路東側法面完掘状況（西より）



17-3 調査区東端部 No.19-17 水路2・3掘り方東部法面完掘状況（西より）



17-4 調査区東端部 No.15-14 水路2・3掘り方東部法面完掘状況（西より）

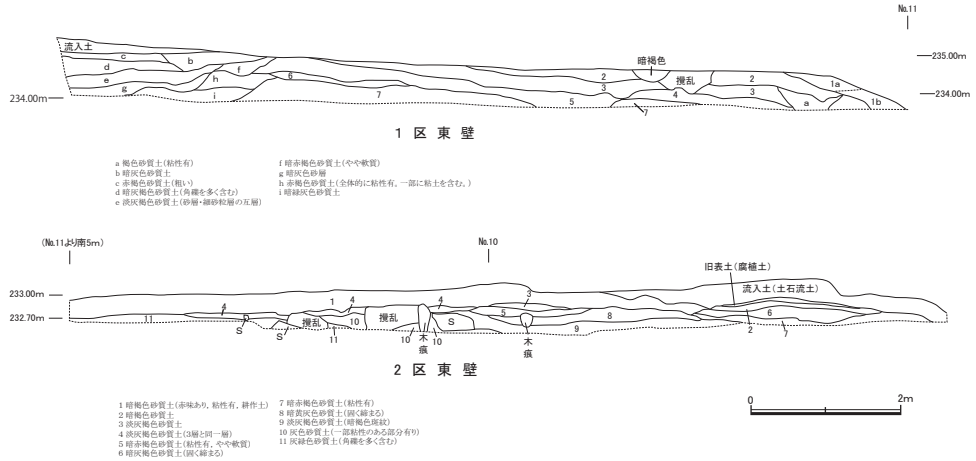


17-5 調査区南部試掘調査1区（No.12-11）調査状況（東より）



17-6 調査区南部試掘調査2区（No.11-10付近）調査状況（北東より）

写真 17（東広島）ががら山等災害復旧工事（ががら職員宿舎西）に伴う試掘（立会）調査（4）



第18図 調査区南部(東ガガラ遺跡) 試掘調査区土層断面図(1:100)

状況を確認した(写真 17-5)。約 40cm 掘り下げたところで、全体に暗褐色系の堆積土となったため、土上面を清掃し遺構の有無を精査した。調査区東端の土層断面観察によると、清掃面は耕作土下底部付近で、ここまで調査で撤去した土は、斜面上方からの流入土砂および耕作土と考えられた。精査の結果、遺構・遺物とも確認されなかった。

遺構・遺物が検出されなかったことから、一旦全体を掘り下げることが止め、調査区東半部にトレンチを設定し、遺構・遺物の有無や堆積状態を確認した。トレンチは幅(東西)約 2m、長さ(南北)約 11mの規模とした(第17図1区の長方形部分)。上層の調査と同様に、約 10cm ずつ掘り下げながら調査した(写真 18-2)。約 60cm 掘り下げた段階で、地山に達していると判断し、調査を終了した。旧地形の表土は確認されなかったことから、旧地形を削平して平坦面を造成していると考えられた。また、後述する堆積層のうち、第2層以下が自然堆積層と考えられ、旧地形が残されていると判断した。

堆積層は災害に伴う流入土を除き、以下の7枚に区分した(第18図1区東壁、写真 18-3)。

- 第1層 赤褐色砂質土
- 第2層 暗褐色～暗黄褐色土(粘性あり)
- 第3層 黄灰色砂質土
- 第4層 淡黄灰色砂質土(砂粒が粗い)
- 第5層 淡黄灰色 + 暗灰色砂質土
- 第6層 暗黄灰色砂質土(きめが細かい)
- 第7層 淡黄灰色砂質土 + 暗黄灰褐色砂質土斑紋



18-1 調査区南部試掘調査1区調査（遺構確認作業）状況（北西より）



18-2 調査区南部試掘調査1区中央部トレンチ調査状況（西より）



18-3 調査区南部試掘調査1区中央部トレンチ完掘状況と東壁土層堆積状況（北西より）



18-4 調査南部試掘調査区2区完掘状況（北西より）



18-5 調査区南部試掘調査2区東壁土層堆積状況（西北より）



18-6 調査区南部試掘調査区2区掘削（削平）状況（北西より）

写真 18（東広島）ががら山等災害復旧工事（ががら職員宿舍西）に伴う試掘（立会）調査（5）

第1層は耕作土および耕作地造成土、第7層が地山層である。第2層は土質から見て遺物を包含している可能性があることから、第2層については調査範囲を西半部まで広げて堆積層の広がりを確認するとともに、掘り下げに際しては特に遺物の有無を注意した。調査の結果、調査区北半は自然流に関わる谷地形の埋積層であることが判明した。第2層の調査区西半部への広がりはわずかで、東半部から約1m程度西側へ広がりを見せる程度であった(第17図1区の灰色部分)。遺物は確認できなかった。第2層で遺物・遺構が検出されなかったことや堆積層の広がりの状況から、遺構・遺物が検出される可能性がある範囲が1区西半部へほとんど広がることはない判断し、試掘調査による掘り下げを終了した。西半部については水路掘り方掘削時に立ち会うこととした。(水路掘り方掘削の立会調査では、遺構、遺物とも確認されなかった)。

2区 No.11 - No.9+0.5 (+0.5は各基線の中間の補助基線、No.9+5はNo.9とNo.10の間の補助基線を示す)に位置し、南北約13m、東西約4mの規模で、平面への字状の調査区である(第17図2区)。1区同様、全体を10cm程度ずつ掘り下げ、遺構・遺物の有無を確認しながら約70cmまで掘り下げた。深さ約70cmで地山に達したと判断して調査を終了した。旧表土(旧地形)は確認されなかったことから、1区同様に、旧地形を削平して平坦面を造成したものと考えられる。地山の上部に9枚の堆積層を確認したが、広範囲に整層状態を示す堆積層はなく、耕作土下は谷地形の埋積層と推定される(第18図2区東壁、写真18-4・5)。

2. 水路・暗渠排水造成工事

暗渠排水管支柱基礎(帯工)は調査区北部中央付近から南側全域に設置した。しかし、3本の水路が合流する調査区中央から南側は既存の自然流路部を利用し、掘削は基本的に谷地形内のみであることから、調査区北半部の帯工掘り方および暗渠排水管・水路掘り方の掘削について立会調査を行った。調査対象域の帯工掘り方は合計9基で、掘削順に3～11区とした(第16図3～11区)。また、暗渠排水管は水路の下層に設置し、水路掘り方とともに掘削した。水路については、西側を1号水路、中央を2号水路、東側を3号水路と仮称した(第16図1～3号水路)。

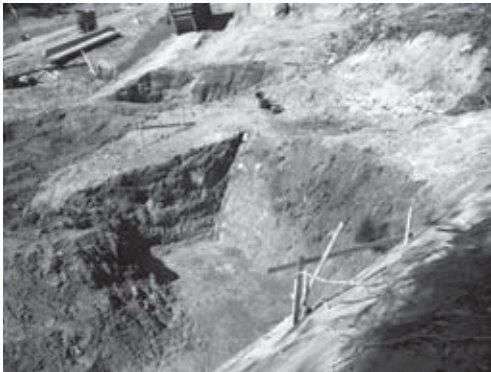
3区 3号水路北端部の帯工基礎である。掘り方は、東西約6.0m、南北約4.5m、北西端で深さ約2.8mの規模である(写真19-3の手前の調査区)。調査区中央部が谷地形で、北側の断面にU字状の暗灰色土の堆積を確認した。谷を切断する形で掘削したため、断面から湧水が続き、湧水を下流に流す目的で、新たに調査区の南東を東西4.6m、南北約2.5m、深さ約2mの規模で掘削した。堆積土は、谷埋土のほかは花崗岩などの地山であった。



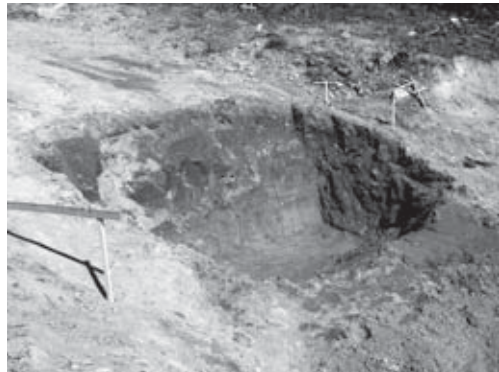
19-1 調査区中央部 3 区 (暗渠排水管支柱基礎)
掘削状況 (北より)



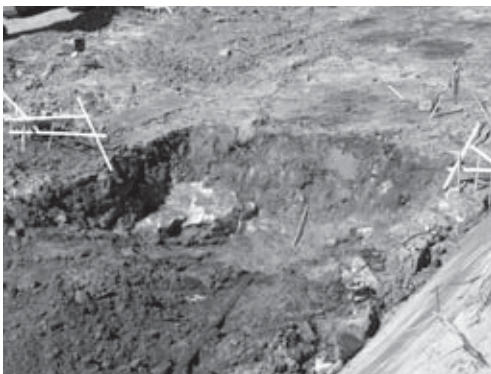
19-2 調査区中央部 7 区 (暗渠排水管支柱基礎)
掘削状況 (北西より)



19-3 調査区中央部 3・4 区 (暗渠排水管支柱基礎)
完掘状況 (南東より)



19-4 調査区中央部 4 区 (暗渠排水管支柱基礎)
完掘状況 (南西より)



19-5 調査区中央部 5 区 (暗渠排水管支柱基礎)
完掘状況 (南東より)



19-6 調査区中央部 6 区 (暗渠排水管支柱基礎)
完掘状況 (南東より)

写真 19 (東広島) ががら山等災害復旧工事 (ががら職員宿舍西) に伴う試掘 (立会) 調査 (6)

4区 3区の西側で、2号水路北端に位置する。東西約6.4m、南北約3.7m、北西端で深さ2.7mの規模である(写真19-4)。中央部に谷が位置し、北側の断面にU字状の暗灰色土の堆積を確認した。谷埋土以外は地山である。

5区 2・3号水路の南部の帯工掘り方である。東西6.3m、南北4.3m、北端部中央で深さ約2.3mの規模である(写真19-5)。調査区中央が谷地形であり、予定掘削深度に達する前に調査区全域で花崗岩岩盤が露出した。谷に位置するため岩盤全体が侵食されており、中央部が最も低く、岩盤全体が谷地形を呈している。

6区 2・3号水路合流部の帯工掘り方である。掘り方は東西約7.8m、南北約6.0mの規模で、北端で2.4～2.5mまで掘削した(写真19-6)。北壁には自然流路2本が東西に分かれて露出した。2・3号水路の掘り方掘削の際に自然流路を埋積しており、調査区上部の堆積層は大半がその際の埋積土である。自然流路はおおむね地山を侵食して流路を形成していた。東側の自然流路上部には工事の際に移動させた大型礫が埋積土上部に見られた。また、西側の自然流路には青灰色粘質土が厚く堆積していたが、東側の流路では大半が礫層、暗褐色砂質土層などで、暗灰～青灰色粘土層はほとんど見られなかった。

7区 1号水路の帯工掘り方で、No.23ラインのすぐ南に位置する。掘り方は東西約7.0m、南北約4.5m、深さ約2.4m(北端部)の規模である(写真20-1の手前調査区)。調査区西端部に谷埋土(暗灰色粘質土)の堆積が認められ、流路の中心が調査区西端の西側に位置していたと想定される。流路の東側および下層は花崗岩バイ乱土等の地山である。

8区 1号水路の帯工で、7区の南側に位置し、No.21ラインのすぐ南側である。掘り方は、東西約6.4m、南北約4.8m、深さ約2.1m(北端部)の規模である(写真20-2)。調査区中央付近まで谷埋土(暗灰色～黒灰色粘質土)の堆積が認められ、流路の中心が調査区西部に位置する。暗灰色粘質土以外の谷埋土が調査区東半部にも認められ、花崗岩バイ乱土を主体とする堆積層である。谷埋土の周辺及び下層は花崗岩バイ乱土および花崗岩岩盤である。

9区 1号水路の帯工で、8区の南に位置する。No.20ラインとNo.19ラインの間にある。掘り方は、南北約3.0m、東西約6.0m、深さ約3.0mの規模である(写真20-3)。掘り方の西半部は岩盤で、東半部は上半部が褐色系および淡黄褐色系砂質土(花崗岩風化土が主体)が堆積していた(中央部は上方の法面造成などの際に掘削した花崗岩岩石類が整地に伴って堆積)。なお、9区、および後述の10区については、打ち合わせと異なり、岩盤掘削の際に立会予定の堆積層も合わせて掘削されたことから、下半部の堆積状態は完掘断面で確認した。



20-1 調査区中央部 7・8 区 (暗渠排水管支柱基礎)
完掘状況 (東より)



20-2 調査区中央部 8 区 (暗渠排水管支柱基礎)
完掘状況 (西より)



20-3 調査区中央部 9 区 (暗渠排水管支柱基礎)
完掘状況 (南より)



20-4 調査区中央部 10 区 (暗渠排水管支柱基礎)
完掘状況 (南より)



20-5 調査区中央部 11 区 (暗渠排水管支柱基礎)
岩盤掘削状況 (北より)



20-6 調査区中央部 11 区 (暗渠排水管支柱基礎)
掘削状況 (北より)

写真 20 (東広島) ががら山等災害復旧工事 (ががら職員宿舍西) に伴う試掘 (立会) 調査 (7)



21-1 調査区北部～中央部1号水路・暗渠排水管掘り方南部掘削状況（北より）



21-2 調査区北部～中央部1号水路・暗渠排水管掘り方南部掘削状況（南より）



21-3 調査中央部2号水路・暗渠排水管掘り方掘削状況（北より）



21-4 調査区中央部No.25-23西側の石切り出し作業場跡（北より）

写真 21（東広島）ががら山等災害復旧工事（ががら職員宿舎西）に伴う試掘（立会）調査（8）

10区 1号水路の帯工掘り方で、9区の南に位置する。No.18ラインとNo.17ラインの間にあり、調査区東半部は工事用道路にかかっている（写真 20-4）。掘り方は、南北約 3.0 m、東西約 6.0 m、深さ約 3.0 mの規模である。掘り方のほぼ全体が花崗岩岩盤で、東端部の上部約 1/3 程度にわずかに褐色系粘質土～砂質土の堆積層が認められた。

11区 2・3号水路の帯工で、帯工掘り方はNo.17ラインとNo.16ラインの中間にある（写真 20-6）。掘り方は、東西約 6 m、南北約 3.6 mの規模で、最大深さ 0.8 m（北端）まで掘削した。以前の立会調査成果からすぐに岩盤が露出することが予想された場所であり、予想通り、深さ 0.5 m前後で調査区全体に岩盤が露出した。バックホウによる掘り下げを途中で中止し、掘削用ドリルを装着したバックホウで掘り下げを継続した。岩盤が露出するまでの立会調査で遺物・遺構とも検出されなかったことから、岩盤の掘削作業の立会は行わ

ず、現状を記録して立会を終了した。

水路・暗渠排水管掘り方 水路・暗渠排水管掘り方は、1～3号水路の合流点より北側(上方)を対象として立会調査を実施した。1号水路は7区(帯工)の北側の水路・暗渠排水管掘り方の掘削を立会調査した(写真21-1・2)。幅約2m、長さ約80m、深さ約1.6m前後の規模で掘削した。暗褐色土が主体で、上半部は床造成の際の盛土、下半は自然地形の谷埋積土と思われる。北部では次第に花崗岩地山が高くなり、調査区北部では地表下約60～70cm、調査区北端部では地表下約50cm程度で花崗岩地山が露出した。

2号・3号水路の掘り方は、幅約1.1m、深さ約0.7mの規模で掘削した(写真21-3)。排水路本体掘り方の両脇に幅約40cm、深さ15～20cmのテラスを掘削した。2号水路は長さ約50m、3号水路は長さ約40m、2・3号水路合流後の長さは約55mである。2号水路掘り方は西半部を中心に、3号水路は東半部を中心に山側を供給源とする褐色系、黄褐色系の堆積土が認められたが、全体として暗褐色～灰黒褐色土の谷の埋積層が主体であった。

暗渠排水管支柱基礎および水路の掘り方の掘削では遺構・遺物とも検出されなかった。

4) (東広島) ががら山等災害復旧工事(農場北西)

所在地 東広島市鏡山二丁目2965番

調査期間 2019(令和元)年9月30日、10月25日・28日

調査面積 約253㎡

調査者 石丸恵利子

調査概要 東広島地区の鏡西谷遺跡(保存区)において、2018年7月の災害によって谷地形部分の法面が崩落し(写真22-1・2)、更なる崩壊を防ぐための復旧対策として、法面成形の掘削が行われた。崩落箇所は発掘調査時の調査地区外(未調査地区)に相当するため、工事に立会い包含層の確認を行った。

崩落は約6m×約9m、土砂の流出は約7m×約18mの範囲に及んでおり、崩落箇所の法面傾斜を緩くする掘削および盛土、また流出した土砂については集積・成形する工事が行われた(写真22-3～5)。調査時の報告において、崩落箇所の谷地形部分は埋没谷と報告されており、斜面掘削の際は遺物等が含まれていないか注意しながら立ち会った。壁面を緩やかにするため、現在の崩落肩部北・西・南側を約3.0m程度斜めに掘削し、崩落底部(下場)についてはこれ以上の掘削は行わず約0.3m盛土をした状態で整地した(肩部と底部との比高差約3.0m)(写真22-6、写真23-1)。

掘削時、北側斜面においては、掘削前から壁面(崩落の地表面から0.5～1.5m下辺



22-1 災害による崩落の状況（北東より）



22-2 災害による崩落の状況（南より）



22-3 掘削の様子（東より）



22-4 掘削の様子（西より）



22-5 斜面成形状況（北東より）

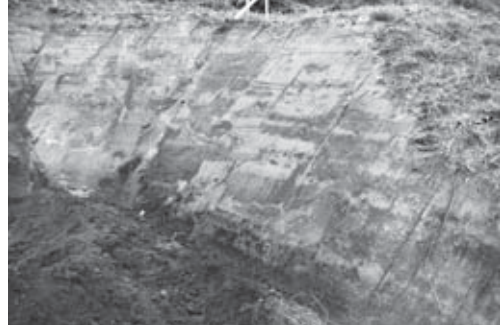


22-6 流出土壌の集積状況（北東より）

写真 22（東広島）ががら山等災害復旧工事（農場北西）に伴う試掘（立会）調査（1）



23-1 斜面成形後の状況（東より）



23-2 北側斜面黒褐色土検出状況（南東より）



23-3 成形後全景（北西より）



23-4 植生マット敷設の様子（北東より）

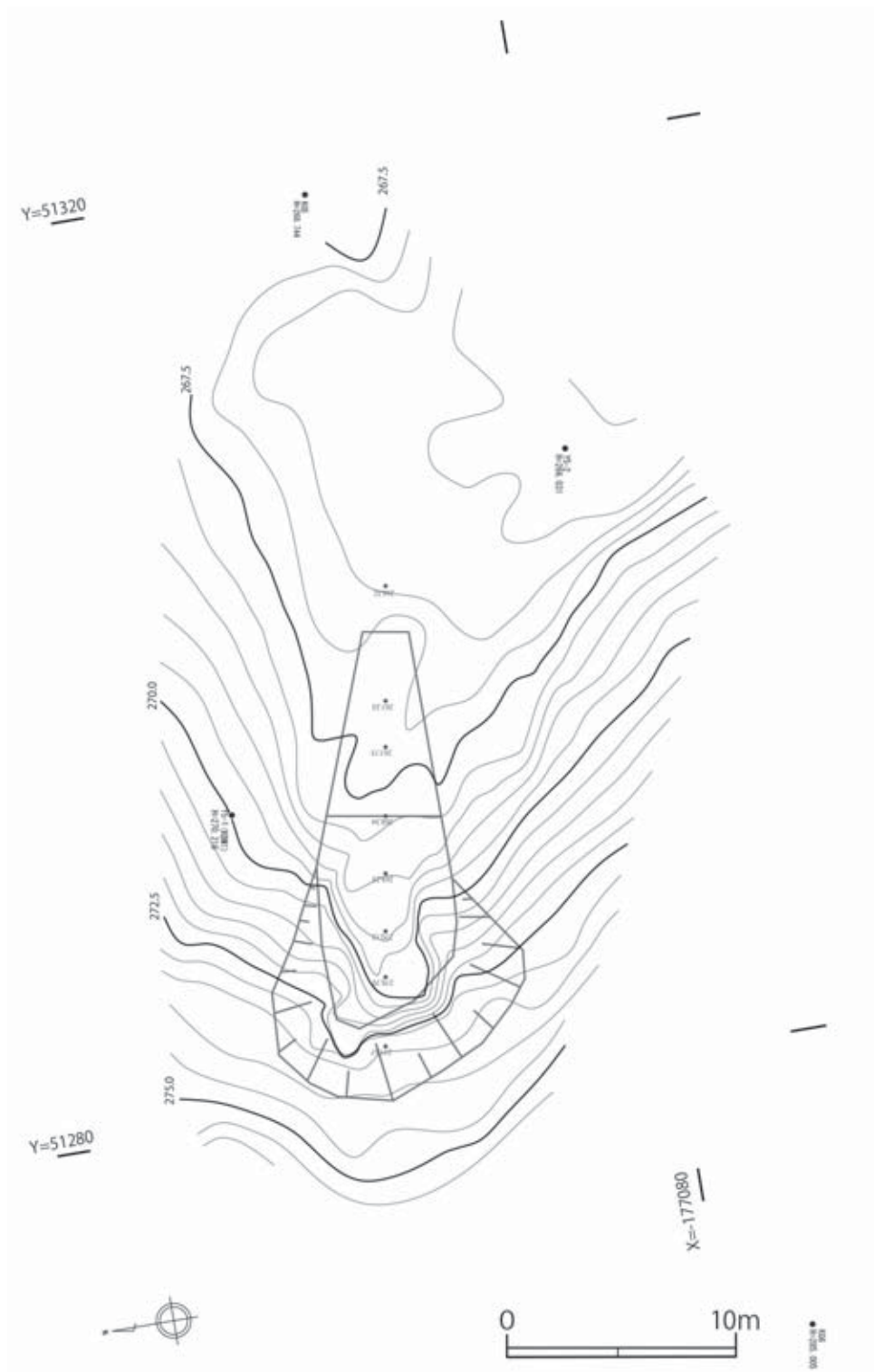


23-5 植生マット敷設後の様子（東より）



23-6 植生マット敷設後の様子（北西より）

写真 23（東広島）ががら山等災害復旧工事（農場北西）に伴う試掘（立会）調査（2）



第 19 図 鏡西谷遺跡の崩落斜面整備後地形平面図（国土座標値は世界測地系）（1 : 300）

り)に炭を含む黒褐色の堆積を確認したが、掘削中を含め遺物を確認することはできなかった(写真 23-2)。念のため炭を2点採取して持ち帰った。遺構・遺物は確認されなかった。

また、流出した土砂については、擬木による復元柱穴の南西端部分まで流れ出たものの上部を整地する形で西側に集積し、崩落場所下場からなだらかな斜面になるように継続させて成形した(写真 23-3)。流出土のなかから土器片を1点採取した。掘削および整地範囲においては、植生マットダブルロンケットアナコンダ I-40(トールフェスク、ペレニアルライグラス、クリーンピングレッドフェスク、レッドトップ、コロニアルベントグラス、ホワイタクローバー、バヒアグラス、バミューダグラス、よもぎ、めどはぎ、やまはぎ、こまつなぎの12種が含まれ、一定間隔で肥料帯がついているもの)を敷設した(写真 23-4～6)。鏡西谷遺跡では遺構主体部においてはティフブレアによる法面保護を実施しているが、保存区全体の管理と合わせて経過を観察したい。整備後、工事業者によって測量が行われ、地形を記録した(第19図)。

5) (東広島) 文学部北側駐輪場取設等工事

所在地 東広島市鏡山一丁目2番1号

調査期間 2019(令和元)年10月23日

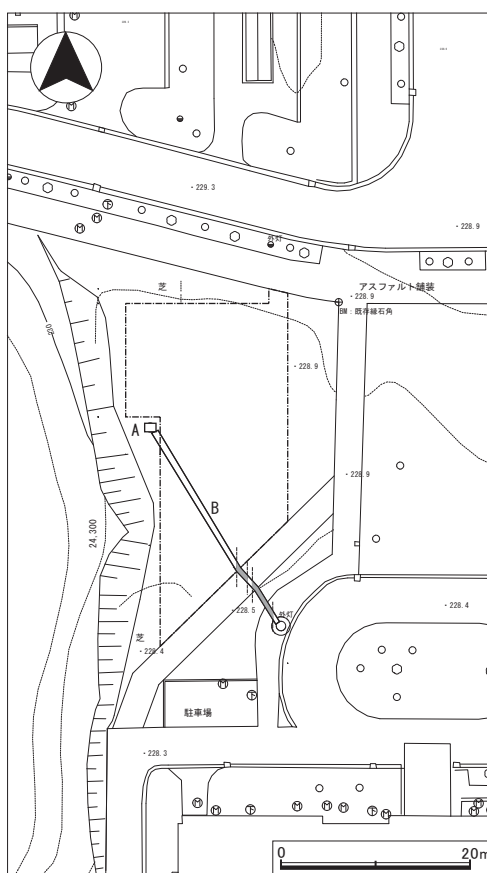
調査面積 426.04 m²

調査者 藤野次史

調査概要 (東広島) 文学部北側駐輪場取設等工事に伴って試掘調査(立会)を実施した。工事は文学部北側と法学部・経済学部南側の2ヶ所で行われたが、埋蔵文化財調査検出の可能性のある文学部北側の工事のみ立会調査を実施した。

掘削工事は、新設外灯基礎掘り方(第20図A)および新設外灯までの電気配管掘り方(第20図B)である。

電気配管路掘り方 電気の供給は駐輪場予定地の南東隣接地に位置する既設外灯から行った。配線を分岐するため既設外灯基礎から新設外灯基礎に向けて配管掘り方を



第20図 (東広島) 文学部北側駐輪場取設等工事調査区平面図(1:800)

(一点鎖線は駐輪場スペース、Aは新設外灯掘り方、Bは電気配管掘り方である)



24-1 電気配管路掘り方掘削状況（南西より）



24-2 新設外灯基礎掘り方掘削状況（北西より）



24-3 電気配管路掘り方通路部堆積状況（南西より）



24-4 電気配管路掘り方未舗装部堆積状況（南東より）



24-5 新設外灯基礎掘り方完掘状況（西より）



24-6 調査終了状況（南東より）

写真 24（東広島）文学部北側駐輪場取設等工事に伴う試掘（立会）調査

幅約 0.5 m、長さ約 24 mの規模で掘削した。掘削深度は地表下 0.4 m前後である。文学部前の既設通路およびその隣接地でコンクリート面を検出した（第 20 図灰色部分）。地表下約 0.2 mに上面があり、厚さは約 3cm である。幅（東西）約 1.7 mの規模と推定されるが、コンクリート面中央部で約 0.5 m途切れていた。ほぼ南北方向に広がっているようで、主軸は文学部東西建物と直交している。コンクリート面全体を露出した後、すべて撤去した（写真 24-3）。コンクリート面の下層は土で、碎石等の下部構造は認められなかった。西から東に緩やかに傾斜していた。文学部移転後の仮設通路等の可能性があるが、規模も含め詳細は不明である。コンクリート面の西側（北西側）では構築物等は認められなかった（写真 24-4）。電気配管掘り方はすべて造成土内の掘削であった。

新設外灯掘り方 東西 1.2 m、南北 0.9 m、深さ 1.45 mで掘削した（写真 24-5）。堆積層は 3 枚に区分され、上層より、表土層、造成土、橙褐色土である。橙褐色土は自然堆積層と思われる。自然地形は西から東に傾斜しており、橙褐色土は西壁で約 30cm、東壁で約 20cm の厚さであった。

調査では、遺構、遺物ともに検出されなかった。

6) (東広島) ががら山等災害復旧工事 (山中池南)

所在地 東広島市鏡山二丁目 812-62 番

調査期間 2019 (令和元) 年 11 月 5 日

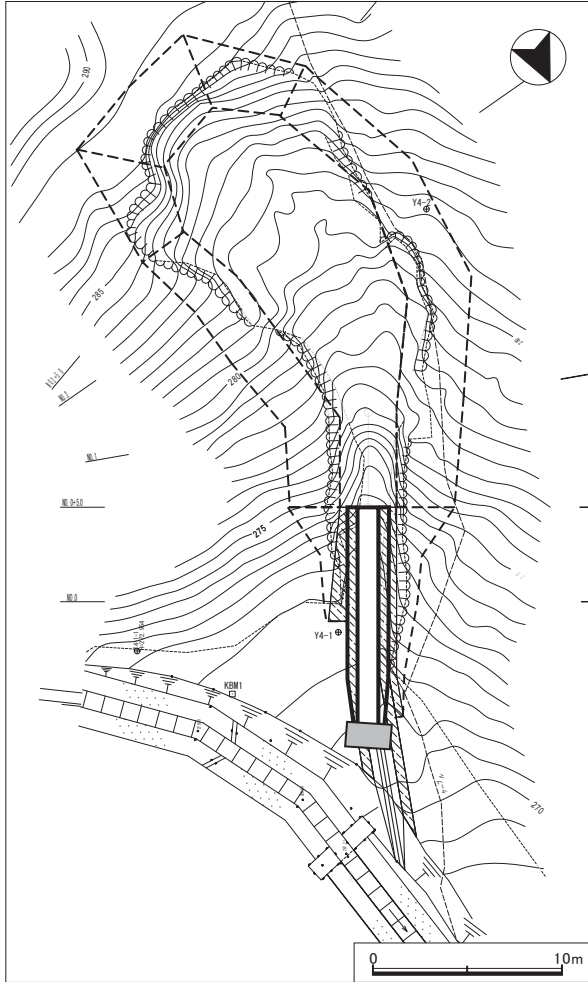
調査面積 383.09 m²

調査者 藤野次史

調査概要 広島大学 (東広島) ががら山等災害復旧工事 (山中池南) に伴って試掘 (立会) 調査を実施した。

鏡山城跡ががら地区の C 地区 1 の段切岸直下に位置する (第 6 図 4)。地滑り部分周辺を成形して法面を造成、地滑り部分の大半を平坦に成形して床面とし (第 21 図太破線部分)、床面の下部から北側の既設排水路まで排水路を新設する工事である。地滑り部分の掘削範囲は、地表からの観察であるが、竖堀等の遺構は確認できず、急傾斜地であること、現状を基本としながら小規模な掘削にとどまることから立会は行わず、緩斜面 (谷側平坦地) に位置する新設排水路の掘り方掘削についてのみ立会調査を実施した。

工事实施時に水路の位置、形状等について工事实施直前に現地で協議し、当初の計画を少し変更して、排水路を一直線にするよう変更した (第 21 図太実線部分)。さらに、既設排水路に接続する前に、既設排水路上部の法面端に水溜の柵を設置することになった (第 21 図灰色部分)。



第 21 図 (東広島) ががら山等災害復旧工事 (山中池南) 調査区平面図 (1 : 400)

(破線は掘削成形範囲、太実線は水路掘り方、灰色部分は集水桝掘り方である)

排水路は山側の斜面と谷部平坦地の境界部から始まり、東端が既設排水路上部の東側法面上端である。排水路掘り方は長さ約 11.8 m で、幅約 1.1 m、深さ約 0.7 m である。排水路本体掘り方の両脇には幅約 40cm、深さ 15 ~ 20cm のテラスを造成した (第 21 図斜線部分)。テラス部は水路両側のコンクリート平坦面を構成する部分である。水路の主軸に合わせて、東西約 2 m、南北約 1.1 m、深さ 0.9 m の規模で桝掘り方を掘削した。排水路掘り方南端から北側 9.2 m は東側の斜面部の堆積層で、9.2 m 以北に谷部堆積層が認められた。斜面部堆積層は、本来、南から北に急傾斜で堆積しているが、排水路掘り方では、斜面を水平に切断した断面を見ている形になり、南から北に向かって下層から上層の堆積層が同一平面上で観察できる状況であった。東側の地形断面 (防災工事法面) と基本的に同一の堆積層を確認できた (写真 25-4)。ただし、東側の地層断面 (法面) では火山灰と推定される明黄褐色砂質土が観察されたが、排水路掘り方では確認できなかった。掘り方北部の、平坦部の堆積層は、東側法面の地形断面最上部の黄褐色砂質土層が厚く堆積しているようで、下層の堆積層は露出せず、谷堆積層もほとんど確認できなかった。桝掘り方部の大半は、既設排水路を設置した際の盛土であった。

調査では、遺構、遺物ともに確認されなかった。

7) (東広島) 東図書館改修工事

所在地 東広島市鏡山一丁目 4 番 5 号



25-1 調査前の調査区全景（南西より）



25-2 排水路掘り方北西端部の掘削状況（北西より）



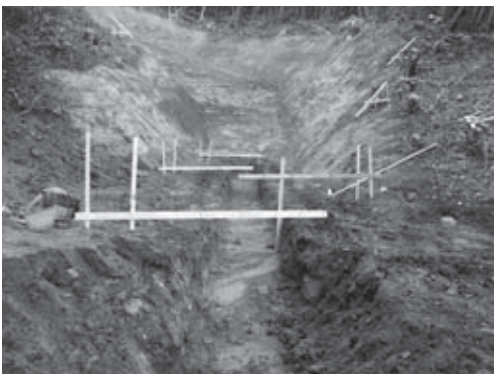
25-3 排水路掘り方北半部掘削状況（南西より）



25-4 東側法面堆積状況（南西より）



25-5 排水路掘り方完掘状況（南西より）



25-6 調査終了状況（北東より）

写真 25（東広島）ががら山等災害復旧工事（山中池南）に伴う試掘（立会）調査

調査期間 2020（令和2）年3月13日・16日・18日・19日

調査面積 1,741 m²

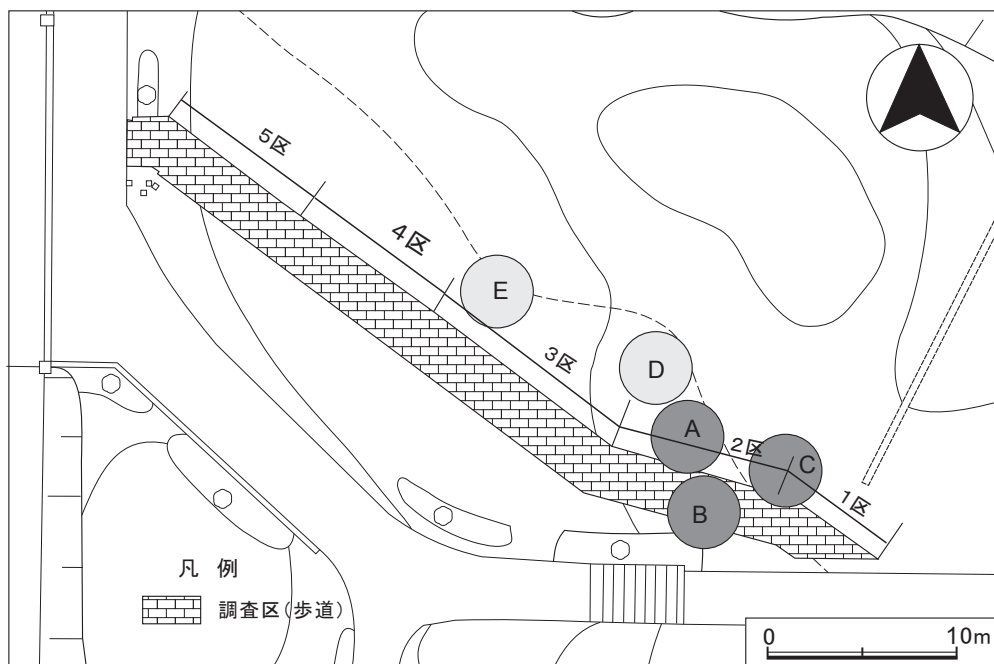
調査者 藤野次史

調査概要（東広島）東図書館改修工事に伴って試掘調査（立会）を実施した。東図書館改修に伴い、図書館南側の生物生産学部と大学会館を結ぶ歩道の改修工事を行うこととなり、立会調査を実施した（第6図3）。調査は、予定地内の樹木撤去および通路新設工事について行った。

1. 樹木撤去・移設工事

中木2本の移設（中木1・2、第22図A・B）、中木1本の撤去（中木3、第22図C）を行った。移設する中木2本はいずれもサクラである。

中木1は北側のサクラ（第22図A）で、根周りをバックホウ、人力で掘削し（写真26-2）、根回りを保護して、樹木を釣り上げ、約10m北西の移植先に移動した（第22図E）。掘り上げのための掘り方は平面楕円形で、東西1.9m、南北2.1m、深さ約0.5mの規模で掘削した（写真27-3）。掘り方内の土は淡黄灰色砂質土が主体で、植栽時の掘り方埋土と推定された。移設先の掘り方は平面円形で、直径約1.4m、深さ0.5mの規模で掘削



第22図（東広島）東図書館改修工事調査区平面図（1：400）
（煉瓦印は歩道、A～Cは移設および撤去樹木、D・Eは植栽移設先を示す）



26-1 調査区全景（北西より）



26-2 樹木移設風景（中木1）（南より）



26-3 樹木移設風景（中木2）（南東より）



26-4 樹木撤去風景（中木3）（南東より）



26-5 樹木移設穴掘削状況（中木1）（南東より）



26-6 1・2区掘削状況（南東より）

写真 26（東広島）東図書館改修工事に伴う試掘（立会）調査（1）

した。灰褐色砂質土が主体で、掘り底付近からコンクリート廃材片が数点出土した。すべて工事土と判断された。

中木 2 は南側のサクラ（第 22 図 B）で、根周りをバックホウと人力で掘削し（写真 26-3）、根回りの保護を行って、バックホウで釣り上げて（写真 27-2）、移植先に移動した。掘り上げのための掘り方は平面楕円形で、東西 1.8 m、南北 2.0 m、深さ 0.45 m の規模である（写真 27-5）。東北部は真砂土、工事埋土であったが、南半分は自然堆積層が残されていた（写真 27-6）。上層より、表土、盛土、旧表土、黄褐色粘質土の堆積が認められ、周囲に自然地形が残されていることが確認された。中木 2 は約 5 m 北側に移設した。移設先の掘り方は円形で、直径約 1.2 m、深さ 0.4 m の規模である。掘り上げ状態を確認できなかったので、堆積層の状態は不明であるが、中木 1 の移設先掘り方および中木 2 の掘り方の堆積状況から見て、旧表土以下の堆積層が残されていた可能性が高い。

中木 3（第 22 図 C）はクヌギの樹根で、根周囲を掘削して撤去した。北側に電気配線が敷設されており、電気配線周辺以外はバックホウで掘り上げ、電気配線周辺は手作業で撤去した（写真 26-4、写真 28-1）。掘り取り穴の平面形は隅丸長方形で、東西約 3.4 m、南北約 2.3 m、深さ約 0.9 m の規模で掘削を行った（写真 28-2）。自然堆積層が残されている部分は多くなかったが、南壁付近は比較的自然堆積層が残されていた。上層より、盛土、旧表土、灰褐色粘質土、黄褐色粘質土（粘性が強く、やや締まる）、西条湖成層の順で堆積していた（写真 28-3）。旧表土から西条湖成層上面までは約 40cm の厚さであった。

2. 通路新設工事

長さ約 45 m、幅約 3 m の規模で掘削した。丁張を基準に、東から順に 1～5 区として調査を行った（第 22 図 1～5 区）。対象地はなだらかな丘陵部で、1・2 区は丘陵平坦部、3～5 区は丘陵緩斜面である。1・2 区はほぼ平坦であるが、1 区は東側に緩やかに下っている。3～5 区は西及び南へ傾斜する緩斜面で、3 区は南への傾斜がやや急である。

1 区 約 20～50cm の掘削を行った。大半は盛土と思われる。

2 区 最深部で約 1.2 m まで掘削した。東半部は大半が中木 2・3 の掘り取りのための掘り方で、掘り取り穴埋土（攪乱土）である。中央部～西部は、自然堆積層が広く堆積しており、上層より、1 層：表土、2 層：灰褐色砂質土（真砂土）、3 層：橙褐色粘質土（盛土）、4 層：旧表土、5 層：淡黄褐色～暗黄褐色粘質土、6 層：黄褐色粘質土、7 層：黄褐色～黄橙色粘質土、8 層：白青色砂質土（非常に固く締まる、西条湖成層）であった（写真 28-5）。6・7 層は旧石器時代包含層相当層と思われる。

西半部北壁で土坑を確認した（写真 28-6）。埋土は赤褐色～橙褐色粘質土である。4



27-1 4区掘削状況（南東より）



27-2 中木2 移設状況（東より）



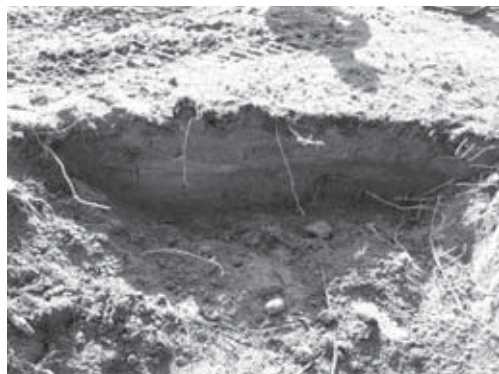
27-3 中木1 掘り上げ状況（東より）



27-4 中木1 移設完了状況（南西より）



27-5 中木2 掘り上げ状況（東より）



27-6 中木2 掘り取り穴土層堆積状況（東より）

写真 27（東広島）東図書館改修工事に伴う試掘（立会）調査（2）



28-1 中木3 撤去状況 (南より)



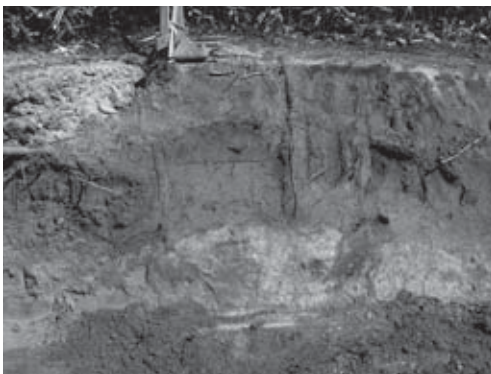
28-2 中木3 掘り上げ状況 (南西より)



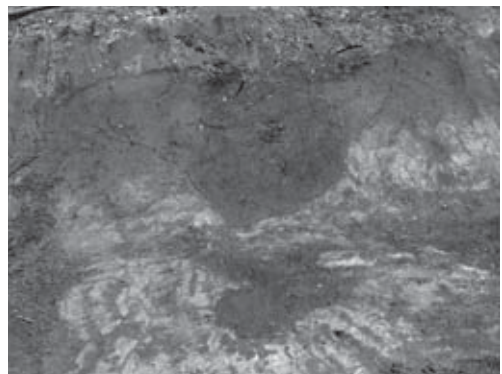
28-3 中木3 掘り取り穴土層堆積状況 (北より)



28-4 2区掘削状況 (東より)



28-5 2区北壁土層堆積状況 (南より)



28-6 2区北壁落ち込み (南より)

写真 28 (東広島) 東図書館改修工事に伴う試掘 (立会) 調査 (3)



29-1 3区北西壁土層堆積状況（南東より）



29-2 3区完掘状況（南東より）



29-3 掘削作業完了状況（1～3区）（東より）



29-4 掘削作業完了状況（2～5区）（北西より）

写真 29（東広島）東図書館改修工事に伴う試掘（立会）調査（4）

層下部付近で掘り込みが不明瞭となっており、掘り込み面は不明瞭である。掘り込み面が4層中にある可能性もあるが、落ち込みの中央部に2層の灰褐色砂質土まじりの土が堆積しており、旧表土付近から掘りこんでいると判断される。また、下底部付近の堆積層にも2層起源と思われる土が混在していた。幅1.7m以上、深さ約0.6mの規模である。工事掘削掘り底で南北約0.8mの間に堆積が残されており、南北1m以上の大型土坑と推定される。埋土の主体は赤褐色～橙褐色粘質土であるが、周囲に黄褐色系の粘質土や砂質土の堆積層が認められる。しかし、自然堆積のように周囲から流れ込んだような状況は認められない。掘り込み面から見て、現代の掘り込み、あるいは風倒木痕と考えられる。

3区 南側へ緩やかに傾斜する斜面をL字状に削平するため、北側で掘削深度が深く、南側では掘削深度はわずか、あるいは盛土となる状況であった。北側で約40cmの掘削を

調査期間 2019（令和元）年2月21日・22日

調査面積 約168㎡

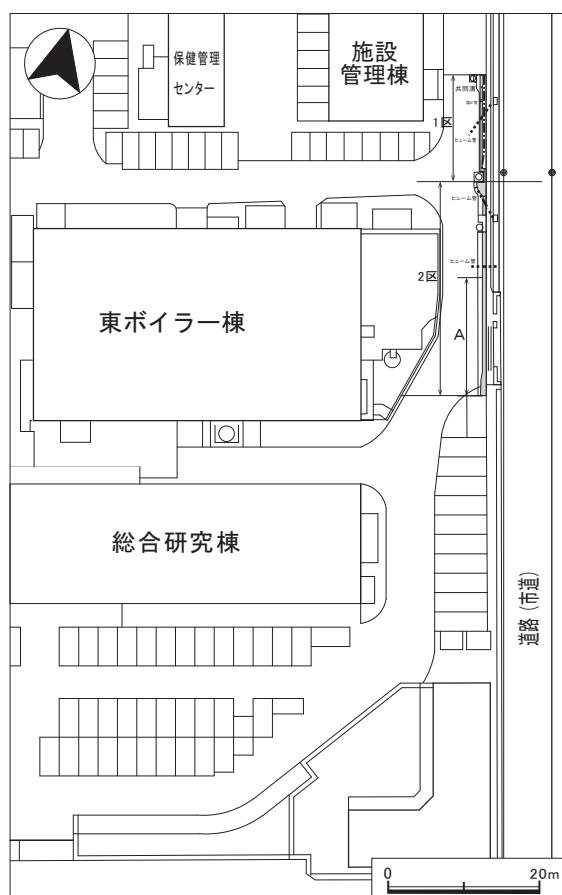
調査者 藤野次史

調査概要（震）基幹整備（給水設備）工事に伴って立会調査を実施した。

開発場所は、震地区東南部に位置する施設部分室・東ボイラー棟東側の南北道路で（第23図1）、施設部分室前の共同溝南端部から総合研究棟西側の駐車場北端までの間の約40mについて構内道路東端に給水管を新設した。調査は、北端部から順次南側に向かって行い、東西道とのT字路交差点に位置する既設マンホール柵南端までを1区、マンホール柵より南側を2区とした（第24図）。

1区は長さ（南北）約14mである。共同溝周辺以外は幅約0.5mの規模で掘削した（当初、幅1mの規模で掘削する予定であったが、調査区の東半で電気配線が露出したため、東半は掘削せず、西半のみ掘削して配管した）。深さは約0.6mの規模で掘り下げた（写真30-3）。共同溝周辺は、最大幅で1m程度掘り上げ、深さは約1.5mまで掘り下げた。アスファルト砕石層の下層はすべて工事埋積土であった。

2区は長さ（南北）約28.3mである。北端部の1区境界部のマンホール柵隣接地、北部の既設マンホール柵付近と南端部を除き、幅約0.5mの規模で掘削した（当初、幅1mの規模であったが、1区に合わせて規模を縮小した）。深さは基本的に約0.8mの規模で掘削したが、北部のマンホール柵北側では既設配管との関係で深さ約0.55mまでの掘削とした。北端



第24図（震）基幹整備（給水設備）工事調査区配置図
（1：1,000）

（実線で囲まれた部分が調査区、灰色部分は実際の掘削部を示す。Aは兵器支廠造成土が確認された範囲である。）



30-1 調査区全景（南より）



30-2 調査風景（1区）（北西より）



30-3 1区の完掘と西壁堆積状況（南東より）



30-4 2区北半東壁堆積状況（北西より）



30-5 2区南半東壁堆積状況（北西より）



30-6 2区完掘状況（南より）

写真 30（震）基幹整備（給水設備）工事に伴う立会調査（1）



31-1 1区・2区境界柵部分掘削状況（南西より）



31-2 2区北部柵部分周辺配管状況（西より）

写真 31（霞）基幹整備（給水設備）工事に伴う立会調査（2）

部の1区境界部に給水柵を設置するための掘り方を掘削した。掘り方は東側が広い平面台形で、東辺1.9 m、西辺1.35 m、東西約1.2 mで、深さ1.2 mの規模である。掘り方の西半分は広島陸軍兵器支廠造成土が良く残存しており、造成土上にも複数枚の堆積層（兵器補給廠・支廠に関連する堆積層を含むと思われる）を確認した。調査区北部の既設マンホール柵は、予定ルート上にあり、予定通りに配管しようとした場合、柵に穴をあけて配管するほかには方法がなかったため、柵の西側を迂回することとした。幅約0.7 m、深さ0.8 mの規模で掘削した（写真31-1）。調査区南端部は、長さ約3 m、幅約0.8 m、深さ約0.8 mの規模で掘削した（写真30-6）。調査区北端から南約12.7 m付近から調査区南端まで、アスファルト碎石層および出入口基礎土の下層では、広島陸軍兵器支廠の造成土が良好に残されていた（写真30-4・5）。

調査では、遺構、遺物とも検出されなかった。

2)（霞）こすもす保育園給水管改修工事

所在地 広島市南区霞一丁目2番3号

調査期間 2019（令和元）年2月24日、3月1日

調査面積 6.5 m²

調査者 藤野次史

調査概要（霞）こすもす保育園給水管改修工事に伴って立会調査を実施した。

こすもす保育園の北側に位置し、前述の基幹整備（給水設備）工事地区の南側隣接地である（第23図2）。当初、基幹整備（給水設備）工事地区給水管に接続する形で保育園倉庫北側および西側に配管し、倉庫南側で保育園の給水管に接続する予定であったが、

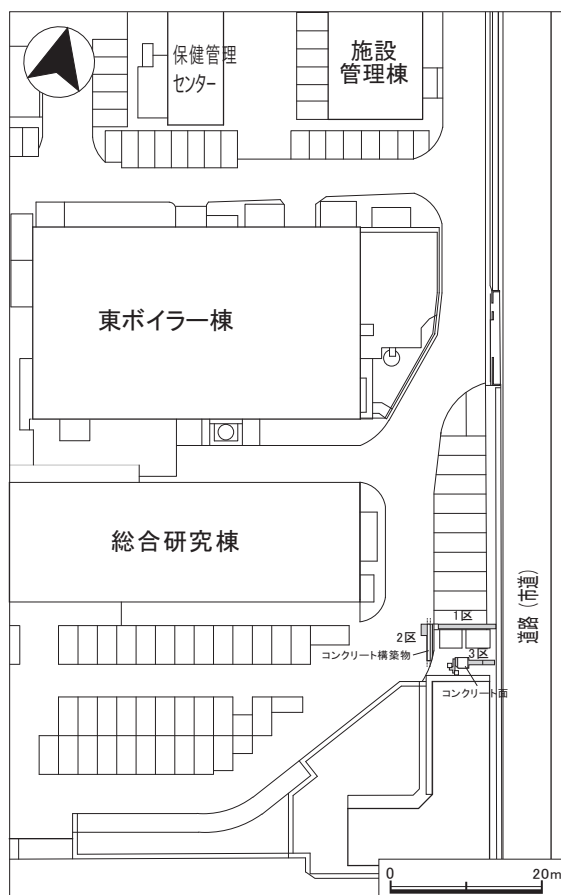
倉庫西側の給水管掘り方内でコンクリート構築物が検出され、配管が困難となった。検討の結果、本工事始点の隣接地給水管から新たに南側へ給水管を分岐し、保育園倉庫の南側まで配管して、保育園の給水管に接続することとした。

調査では、保育園倉庫北側の給水管掘り方を1区、倉庫西側の給水管掘り方を2区、倉庫南側の給水管掘り方を3区とした（第25図）。なお、倉庫東側の配管は地上に配置したため掘削は行っていない。

以下、各地区の調査概要について説明する。

1区 保育園倉庫北側の東西調査区で、倉庫沿いに給水管掘り方を長さ7.6m、幅0.6m、深さ0.85～1.15mの規模で掘削した。堆積状態は、上部に木炭層が確認され、その下層に黄褐色の砂質土（真砂土）層が広い範囲で確認された（写真32-3）。基本層序は、第Ⅰ層：暗灰褐色砂質土（比較的軟質）、第Ⅱa層：暗黄褐色砂質土、第Ⅱb層：木炭層（上層または上下層に暗褐色～黒褐色層の堆積が認められる部分がある）、第Ⅱc層：橙褐色砂質土（真砂土、部分的に暗灰褐色土に変化）、第Ⅱd層：木炭層～暗灰色土、第Ⅲ層：黄褐色砂質土（真砂土、固く締まる）である。第Ⅲ層以下は広島陸軍兵器支廠造成土、第Ⅱ層は兵器支廠・兵器補給廠時代を中心とする堆積層と推定される。また、部分的ではあるが、第Ⅱa層の上層に灰褐色系砂質土（粘性あり、厚さ2cm）、褐色土（鉄分、厚さ0.5cm）が認められた。

2区 保育園倉庫西側の南北調査区で、北側（消火栓掘り方）は長さ1.5m、幅1.5m、南側は長さ（南北）3.35m、幅0.6mの規模で掘削した。北側（消火栓掘り方）については掘



第25図 (霞) こすもす保育園給水管改修工事調査区配置図 (1:1,000)



32-1 調査風景（2区）（北より）



32-2 調査風景（3区）（西より）



32-3 1区南壁堆積状況



32-4 1区完掘状況（北東より）



32-5 2区南半コンクリート構築物検出状況（北より）



32-6 2区南半コンクリート構築下部確認状況（北西より）

写真 32（霞）こすもす保育園給水管改修工事に伴う立会調査（1）



33-1 2区北半コンクリート構築物検出状況（北東より）



33-2 3区調査区完掘状況（西より）



33-3 3区東半北壁堆積状況（南西より）



33-4 3区西半給水桝掘り方完掘状況（北東より）

写真 33（震）こすもす保育園給水管改修工事に伴う立会調査（2）

削ることができたが、南側の給水管掘り方についてはアスファルト碎石層を除去するとすぐにコンクリート構築物が露出（写真 32-5）したことから、実質的な掘り下げはほとんど行わなかった。コンクリート構築物は北側の調査区でも検出されたが、構築物南端部がわずかに残されていたものの、掘り底付近までほとんど削平されていた（写真 33-1）。コンクリート構築物は調査区南部ではほぼ完全な形で残されていると思われる。調査区南部の北端近くから削平が始まっており、調査区北部（消火栓掘り方）の南部ではほぼ掘り底まで斜めに急角度で削平されている状態である。北部の掘り方は地表下約 1.2 m まで掘削し、掘り底にコンクリート構築物の断面が露出している状況である。調査区南部ではコンクリート構築物の深さを確認するため西側に平面 1 × 1 m 程度、深さ 0.6 m 程度の確認穴を掘削し、構築物がさらに下層に連続していることを確認した。配管敷設は困難と判断したことから、さらに

下層への掘削は行わなかった（写真 32-6）。調査区北部の状況からするとコンクリート構築物は、幅約 0.4 m、高さ 1 m 以上の擁壁状の構築物と考えられる。多量の円礫を骨材として利用しており、広島陸軍兵器支廠（兵器補給廠）関連の遺構と考えられる。防火用水、建物の基礎などの可能性がある。調査区北部のコンクリート構築物の断面部分は平滑であり、接合部と考えられる。基底部付近の可能性はある。しかし、もう少し下部にコンクリート床面が存在する可能性もあるものの、構築物下底を確認はできなかった。また、コンクリート構築物は南北約 3 m 分を検出した。北側及び南側に遺構は続いている。なお、西側の壁面には型枠痕が見られ、枠板の幅は 24cm 程度である。

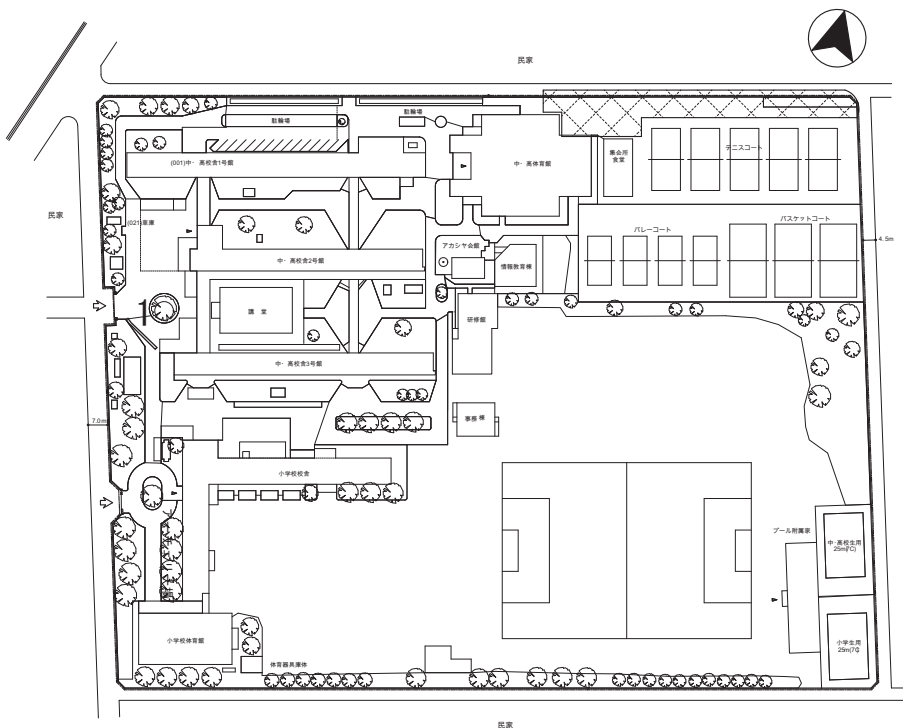
調査区北部の東壁沿いで鉄製配管（地表下約 0.5 m）、電気ケーブルのコンクリート配管（地表下約 0.65 m）が露出した。南側の電気柵に接続されているため、そのまま残し、コンクリート配管の下を掘削して、1 区と接続した（写真 33-1）。

なお、調査区北部で石垣構築材 1 点、人頭大の角礫数点が出土した。石垣や基礎栗石層などは確認されず、原位置を完全に遊離したものと判断された。また、コンクリート構築物の大型破片が出土した。

3 区（迂回路） こすもす保育園園舎と倉庫間の東西調査区である。東端のコンクリートブロック塀（霞地区東端の境界塀）隣接部から東西方向に配置する給水管掘り方と給水柵掘り方で、給水柵隣接部に位置する既設の給水管止水栓配管と新設給水管を接続した。給水管掘り方は、長さ（東西）3.4 m、幅 0.6 m、深さ 0.35 m の規模で掘削した（写真 33-4）。表土下は淡黄褐色砂質土（真砂土）で、掘り底付近で、瓦片、土管片などが出土した。給水管の西側に柵掘り方を掘削した。掘り方は、東西 1.4 m、南北 1.4 m、深さ 0.45 m の規模で掘削した。全面にわたりコンクリート面が露出した。コンクリート面の直上に旧表土と思われる暗褐色土層が認められ、ガラス瓶破片、瓦破片などが出土した（写真 33-4）。柵の掘り底が配管の底面より高かったため、全体を露出するに至らず、高さ調整のため埋め戻した。コンクリート面は配管掘り方側（東側）に広がっていると推定されるが、規模は不明である。西側は柵掘り方東端より 1.4 m 西で途切れていることを確認した。約 1 m 西に既設給水管の止水栓柵が位置し、園舎内への配管とともに露出させた。配管は地表下 0.35 m に上面があり、既設管との接続のための配管掘り方は地表下 0.45 m まで掘削した。

翠地区（広島市）

本年度は、翠地区における協議は（翠）正門排水管補修工事 1 件のみで、この 1 件について立会調査を実施した。



第 26 図 2019 年度翠地区の立会調査位置図 (1 : 3,000)
 (1. (翠) 正門排水管補修工事)

1) (翠) 正門排水管補修工事

所在地 広島市南区翠一丁目 1 番 1 号

調査期間 2019 (令和元) 年 7 月 22 日・23 日・25 日

調査面積 15.4 m²

調査者 藤野次史

調査概要 補修工事を行う排水管は、正門守衛所東側から南西に向かう南北ルートと守衛所南西の排水樹から東へ向かう東西ルートで、東西ルートは既存排水管掘り方を利用した再掘削であるため、南北ルートについて立会調査を行った (第 26 図 1)。

南北ルートは、守衛所東側隣接地の排水樹と中・高校舎 3 号館西側隣接地の排水樹を直線的につなぐもので、幅約 0.9 m、長さ約 16 m の排水管掘り方を掘削した。排水管敷設であるため、掘り方底部は傾斜を有し、北端部を約 0.8 m、南端部を約 1.2 m まで掘削した。南部でヒューム管 1 本、鉄管 2 本、中央部でヒューム管 3 本、鉄管 1 本、北部で北端部の排水樹に接続するヒューム 1 本を検出した (写真 34-3・4)。南部の鉄管については掘り方を確認できなかったが、その他については掘り方がいずれもアスファルト基礎 (砕

石層) 直下から掘削されており、第2次大戦後の敷設と判断される。

配管掘り方が掘削された部分以外は基本的に旧制広島高等学校建設に伴う造成土と推定される堆積層が良く残されていた。基本層序は以下の通りである。

- 第1層 アスファルト (約5cm)
- 第2層 碎石層 (アスファルト基礎) (約15cm)
- 第3層 橙褐色砂質土 (約60cm)

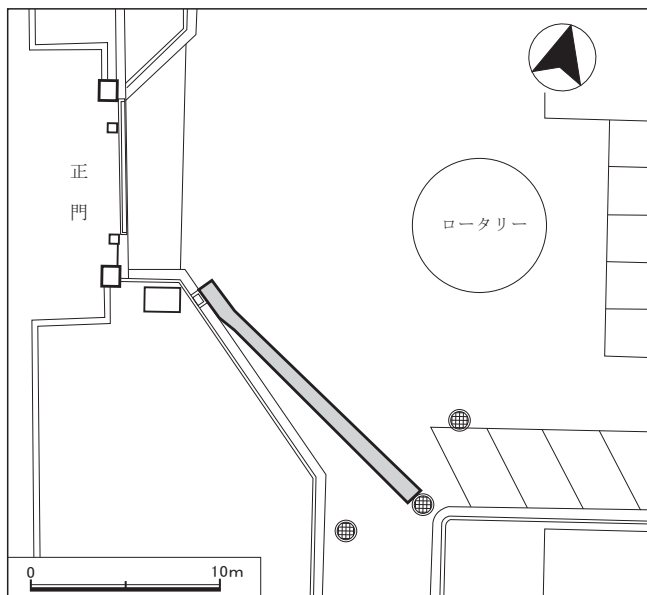
第4層 灰黒色砂層

第3層は細分可能で、観察を行った個所では4枚に細分した(写真34-5)。各層の色調、土質等は以下の通りである。

- 第3a層 黄褐色粘質土 (約5cm)
- 第3b層 橙褐色砂質土 (粗い砂粒を主体とする) (約5cm)
- 第3c層 黄褐色粘質土 (7～8cm)
- 第3d層 橙褐色砂質土 (粘質土ブロックを多く含む) (約40cm)

第3d層下部には大小の角礫、亜角礫を包含していた。大型礫は扁平な形状で、底面は平坦で、灰黒色砂層上面に敷きならべるように配されていた。造成にあたって、最初に適当に大型の礫を配置しながら、礫混りの粗い粒子の花崗岩真砂土を投入しているものと推定される。

調査の結果、遺構、遺物とも検出されなかった。



第27図 (翠) 正門排水管補修工事調査区配置図 (1:400)
(灰色部分が調査区である)



34-1 調査区全景（北より）



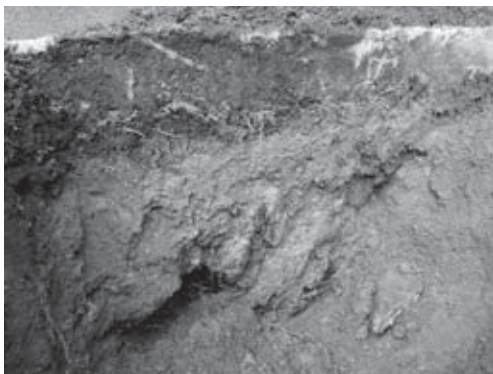
34-2 排水管掘り方掘削状況（南より）



34-3 調査区中央部配管検出状況（北東より）



34-4 調査区北部配管検出状況（南より）



34-5 調査区北部西壁堆積状況（北東より）



34-6 第3層下底部角礫出土状況（南東より）

写真 34（翠）正門排水管補修工事に伴う立会調査

3. 小 結

2019年度は、東広島地区6件、霞地区2件、翠地区1件の立会・試掘調査を実施した。このうち、東広島地区で弥生時代、中世、霞地区で近代の遺構・遺物を検出した。

東広島地区では、(東広島)陣が平山災害復旧工事で遺構・遺物を検出した。工事対象地区は中世山城跡の陣が平城跡の南側中腹～山麓に位置し、西より、園舎北側地区、幼稚園駐車場東1地区、同2地区、同3地区の4地区の工事地区で構成される。

園舎北側地区、幼稚園駐車場東1地区では弥生土器が出土した。園舎北側地区では掘削面積が狭く、遺物包含層上面までの掘削であったことから遺構は確認できなかった。隣接地に遺構が存在するような平坦部などは存在していない。弥生土器出土範囲は急傾斜地であり、遺構が存在するとすれば階段状の平坦面を造成し住居を構築した小規模な集落跡である可能性が考えられる。また、上方には堀切・堅堀が位置しており、山城築城に関連して原位置を移動した遺物かもしれない。弥生土器は、壺形土器、甕形土器があり、口縁端部を上下に拡張して3条程度の凹線文を施している。口頸部破片以外は小破片のみで、調整の詳細は不明である。後期Ib～Ic期(藤野 2007)に位置づけられると思われる。幼稚園駐車場東1地区では、調査前に調査区南端部の広い範囲で弥生土器を採集したことから、工事では採集範囲付近を中心に弥生土器の出土状態を確認した。工事法面を中心に弥生土器の出土層、出土範囲を確認することができ、工事前に採集した土器は工事法面で確認した包含層から流出し拡散した状態であることが推定された。調査では遺構は確認できなかったが、工事地区の西側隣接地および東側隣接地に小規模な平坦地が残されており、遺構が存在する可能性がある。弥生土器は、壺形土器、甕形土器が主体である。壺形土器は胴部が球形状で膨らみの強いものと肩部が不明瞭で長頸気味のもので認められる。肩部～胴部上半に楕円波状文、貝殻腹縁による刺突文を施している。胴部外面はヘラ磨き調整、胴部内面は丁寧なナデ調整である。口縁部は明確に壺形に分類できるものは出土していないが、後述の甕形土器と同様に、口縁部を拡張して凹線文を施すものが主体と推定される。甕形土器は、口頸部が大きく外反し、口縁端部を拡張して3条程度の凹線文を施している。胴部外面はヘラ磨き調整、ナデ調整で、内面はヘラ削り調整が主体である。後期Ia・Ib期(藤野 2007)を主体とする時期と思われる。

幼稚園駐車場東2地区では、中世の遺構・遺物を確認した。調査区北端部から頂上部にかけて、陣が平城跡の東郭群と西郭群を画する堀切とそれに通じる通路を兼ねた堅堀が認められ、大手と推定される場所である(本号研究編梅本論文参照)。工事範囲では明確な遺構を確認することはできなかったが、瓦質土器挿鉢が出土した。防長型挿鉢と考え

られるもので、時期は 16 世紀前半～中頃と推定された。従来、陣が平城跡は尼子氏の鏡山城攻めに伴う陣城と推定されてきたが、今回の調査成果からすると、鏡山城を守護した大内氏方の城跡である可能性が高くなったと考えられる。今回の調査では、隣接する陣が平城跡の踏査も行った。十分なものではなかったが、従来知られている規模（石井 1996）よりもかなり広範囲に関連施設が広がっていることを確認した。同じく東広島地区の敷地内に所在するががら山の 2009～2012 年度調査においてががら山全域に郭や堅堀などが検出され、ががら山全体が山城として機能していたことが明らかとなった（藤野・永田・石井・吉野編著 2013）。今回の調査成果も含め、これまでの調査成果から見て、国史跡となっている鏡山城跡を中心に関連施設が周辺部に広範に配置されていることが推定され、今後、計画的な調査研究が必要であろう。

霞地区では、(霞) こすもす保育園給水管改修工事 2 区でコンクリート構築物を検出した。遺構は、幅約 0.4 m、高さ 1 m 以上の擁壁状を呈する。工事は遺構の下底部まで及ばなかったため遺構の性格を明確にすることはできなかったが、遺構断面の状況やコンクリートの質、骨材等から見て、広島陸軍兵器支廠（補給廠）の附属施設と推定される。なお、(霞) 基幹整備（給水設備）工事 2 区では広範囲で広島陸軍兵器支廠造成土を確認した。

引用文献

- 石井隆博 1994 「陣ヶ平城跡」『広島県中世城館遺跡総合調査報告書第 2 集』広島県教育委員会、98 頁。
- 藤野次史 2007 「西条盆地と広島大学校地内の弥生土器」『広島大学埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－アカデミック西部地区の調査－』広島大学埋蔵文化財調査室、407～448 頁。
- 藤野次史・永田千織・石井隆博・吉野健志編著 2013 『鏡山城発掘調査報告書－重要遺跡（鏡山城跡ががら地区）範囲確認事業に係る発掘調査－』東広島市教育委員会。